

Title	地図・メディアに描かれた釜ヶ崎：大阪市西成区釜ヶ崎の批判的歴史地誌
Author	水内, 俊雄
Citation	人文研究. 53 卷 3 号, p.151-186.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

地図・メディアに描かれた釜ヶ崎

—大阪市西成区釜ヶ崎の批判的歴史地誌—

水内俊雄

1. はじめに

「大阪市。もはや戦後ではないといわれて数年、マンモス都市大阪はかつての焦土と瓦礫の中から、不死鳥のようによみがえった。このようなエネルギッシュな近代都市の一隅に、これまでのどんな繁栄にもあずからなかった人々の住む街、人呼んで大阪のカスバ、釜ヶ崎の暗黒地帯がある」。この台詞は、1960年に封切された、東宝制作の「がめつい奴」の冒頭で読まれる。この「がめつい奴」は、前年の舞台公演の大ヒットを受けて、千葉泰樹監督によって映画化されたものである。武部によれば「この作品は、昭和三十四年十月、東京・日比谷の芸術座で上演され、九か月にもおよぶ驚異的なロング・ランを達成した大ヒット作。・・・当時としては、日本演劇史上、最高の記録を打ち立てたとか」¹⁾、演劇史上、映画史上でも記録に残るものとなった。と同時に、大阪の人々の脳裏に釜ヶ崎イメージを焼き付けることになるひとつの代表的な映画となった。

メディアがつくりあげる場所イメージは、ともすれば誇張され、一人歩きする場合が多い。「人呼んで大阪のカスバ、釜ヶ崎の暗黒地帯」は、最大公約数的な表現を用いれば日本最大の日雇労働者の街として括られるが、このような呼称や語りは、単に日雇労働者の街以上のものを釜ヶ崎から想起させよう。実際この映画の映像を仔細に検討してみると、釜ヶ崎の視覚的現実、いろいろな意味合いが付加されながら、かなりこみいったややこしい形で登場してくる。ここにあげた検討課題は、ただちに本稿の目的につながってゆく。すなわち、現代において、釜ヶ崎とともに「あいりん(地区or地域)」²⁾、西成とも呼ばれる「場所」の複雑で入り組んだ地理的な形成のされ方を、歴史的にさかのぼり確定してゆきたいことにある。その中で、1961年8月の釜ヶ崎暴動とともに、その前年9月に封切されたこの映画に登場した、1950年代末期から60年代初頭、昭和30年代中ごろという時期が、釜ヶ崎のイメージ形成に決定的な役割を果たしたのではないかという筆者の認識がベースにある。それが本稿の冒頭でこの映画を言及した理由ともなっている。

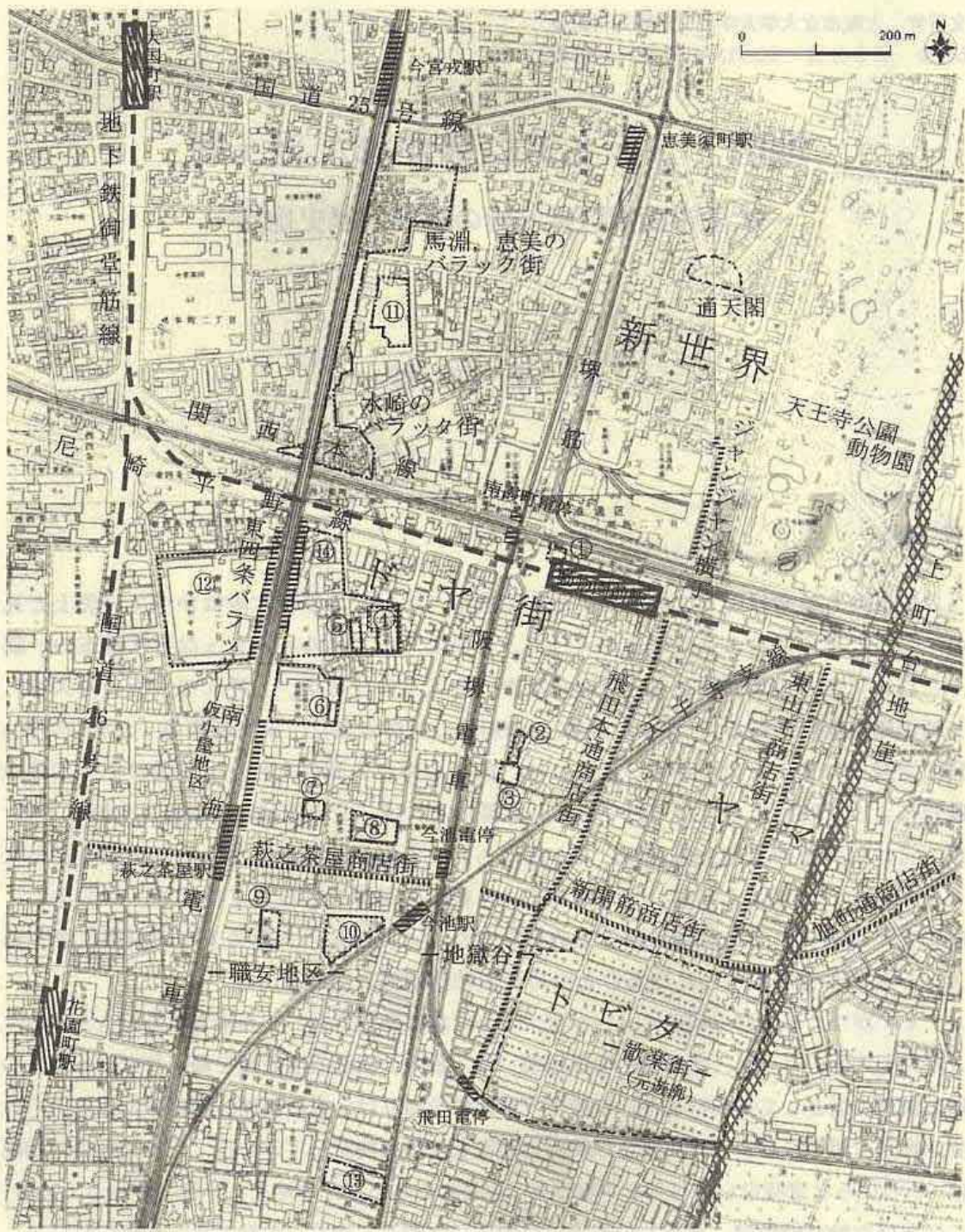


図1 1960年代初頭の釜ヶ崎付近の空間構成

- ①市立愛隣寮 ②市立西成市民館 付設保育所 ③市立愛隣会館 あいりん学園(小中学校)
- ④市営今宮改良住宅 ⑤旧四恩会館 乳児院→初代西成労働福祉センター
- ⑥萩之茶屋小学校 ⑦旧済生会今宮診療所 西成市民館 ⑧西成警察署 ⑨西成職業安定所
- ⑩東萩公園(三角公園) ⑪馬淵生活館 ⑫今宮中学校 ⑬大阪自強館
- ⑭後のあいりん総合センター敷地(愛隣住宅改良地区指定)

大阪社会学研究会「特集 釜ヶ崎実態調査報告」ソシオロジ8-3, 1961年, 大橋薫担当, 10頁所収地図掲載情報をもとに筆者が作成。

原地図は『大阪府航空写真真地図集』大阪府, 1961年より

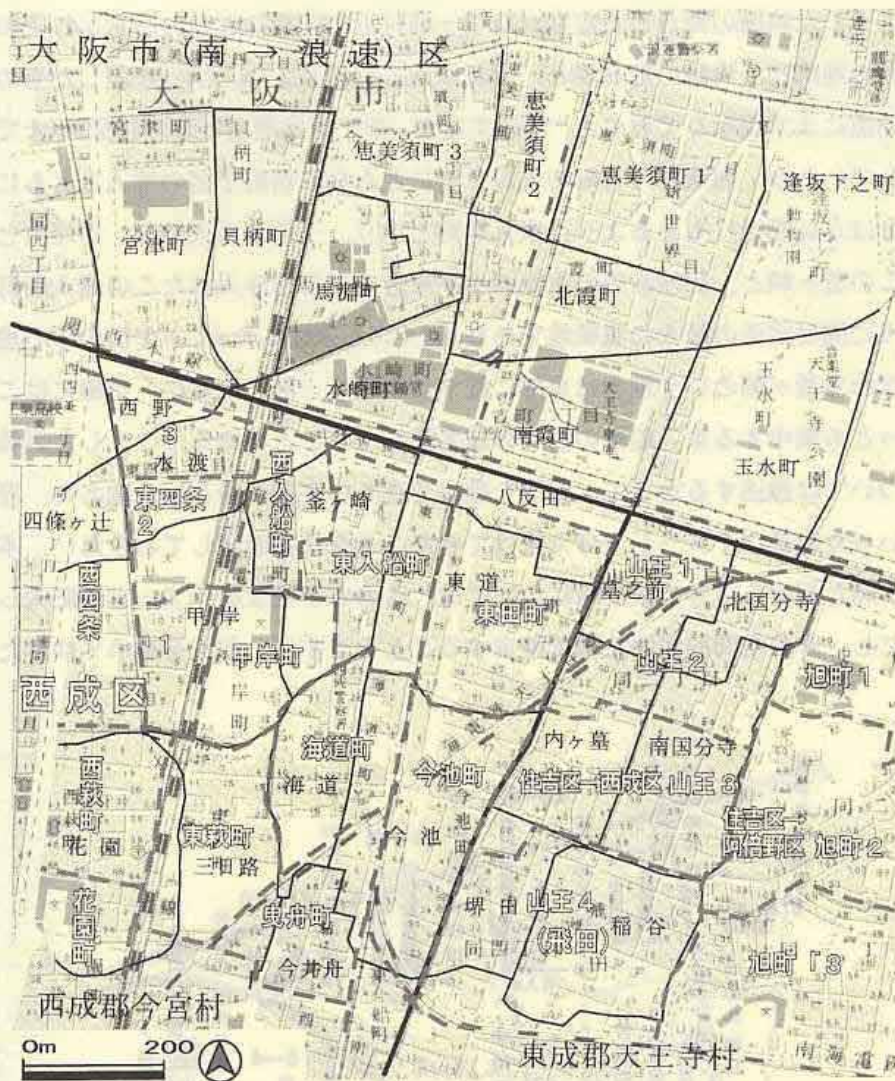


図2 釜ヶ崎周辺の地名の変遷

黒字は、1887年の大阪市第1次合併時点の町名および小字名。東西を横切る関西線より以北が大阪市南区となり、新町名が導入され、以南は、西成郡今宮村と東成郡天王寺村が分断されその南部が残り、小字名はそのまま残った。境界線は黒色細実線である。太実線は1897年当時の市村界。なお南区側の町名は、1903年の第5回内国勸業博覧会の敷地となり、その後、北霞、南霞町は霞町に統合されるが、それはこの図には反映されていない。

白抜き文字は、1922年に今宮町(1917年に今宮村は町制施行して今宮町に)は小字名を廃止し町名を導入したときのものである。1925年に大阪市に編入され、西成区、天王寺区となってもそのまま使用された。境界線は、黒灰色点線である。浪速区は南区から分区の形で、同年に生まれた。

1943年に新区制度で、阿倍野区などが登場し、旧区の区域も含めて変更になった。特に山王地区は、住吉区から西成区に、かつての長町は南区から浪速区に変更となった。
1972年に住居表示導入で、西成区は山王、太子、萩之茶屋の町名となるが、その境域は示していない。

原図は、国土地理院1952年測図、1956年発行の1万分の1地形図「大阪南部」である。1950年初頭の状況がわかる。

図1は、こうした映画の舞台と設定された釜ヶ崎付近の施設などの分布を示しており、図2は、同じ範囲の地図に、当時の町名界と、それ以前に存在していた字界を記したものである。事実だけを簡潔にまず提示しておく、後述するが、釜ヶ崎は地名として1922年までは小字名として存在していたが、西成郡今宮町の人口急増にともなう新町丁名の導入とともに消滅し、釜ヶ崎の半分ほどは図2にもあるように東入船町となり、一部が西入船町、甲岸町となったこと。そしてこの釜ヶ崎と、紀州街道の東側の小字東道を一部組み入れたこの東入船町が、図3にもあるように簡易宿所の最大の集積地であり、図1にも表記したが、ドヤ街の中心地区であったこと、すなわち釜ヶ崎という地名は東部に接する東道の一部とともに、正確にはこうした簡易宿所がもっとも集中する東入船町の前身の地名であったことである。こうした経緯や図1などの状況については後述するとして、範囲を確定できる小字釜ヶ崎という地名に、歴史は実に多くのこみいった複雑なイメージを与え続けてきたことをまず確認しておきたい。本稿では以降、小字釜ヶ崎と記する以外の釜ヶ崎については、このさまざまなイメージで肥大した釜ヶ崎をさすことにし、その空間的範囲を線で確定することをせずに、叙述を進めてゆきたい。

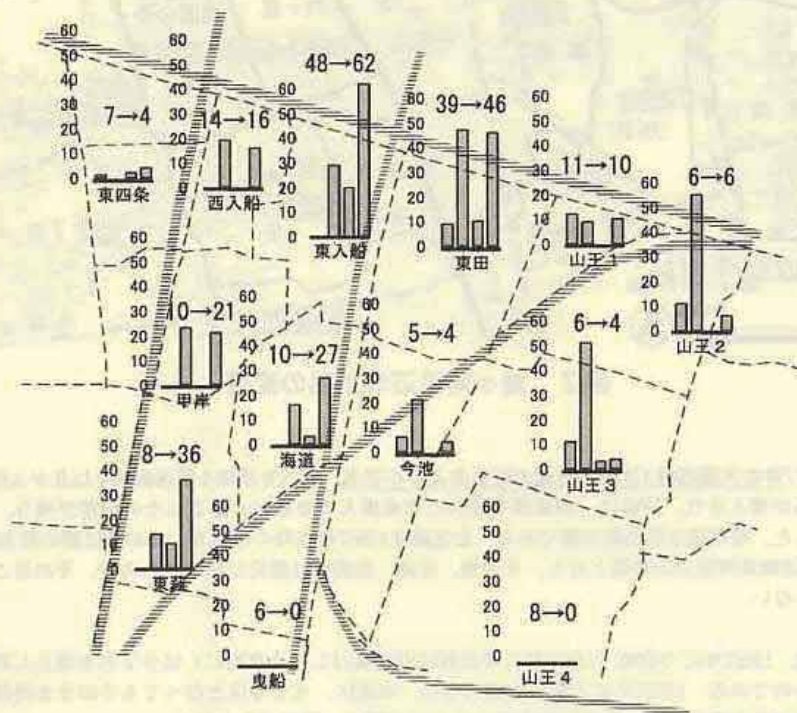


図3 1960年代における釜ヶ崎および近辺の各町別簡易宿所数などの分布

棒グラフは、各町における左から、旅館、一般アパート、日払アパート、簡易宿所の数を高さで表している。西成警察署『あいりん地区内各種業者名簿』1968年4月現在、より作成。

また棒グラフ上の数字は、左側が当該町の1960年1月現在の簡易宿所数で、右側は上述の資料による1968年4月現在の簡易宿所数である。前者の数字の出典は、大阪社会学研究会「特集 釜ヶ崎実態調査報告」ソシオロジ8-3、1961年、大橋薫担当の7頁の表によっている。

2. ふたつの映画に描かれた1960年ごろの釜ヶ崎

再び、「がめつい奴」の映画に戻ってみよう。最初にある配役紹介の背景映像で、大阪城を空撮した後、中ノ島から、一気に大正区から西区、港区、此花区の上空からの映像となり、建設中の環状線の高架と、それがそのまま安治川をまたぐ安治川橋に代表される、復興途上の西大阪が映し出され、その後に通天閣の見える新世界上空に場面が変わると、上記のナレーションがはじまる。

「人呼んで大阪のカスバ」という台詞あたりで、空撮は浪速区に通天閣から西のほうに移り、そして「釜ヶ崎の暗黒地帯がある」というところで映し出されるのは、同じ区内、恵美小学校の横の都市計画公園用地に予定されているところを占拠している、有名な恵美バラックであった（図1、写真1参照、写真の画面左が恵美小学校）。この空撮が終って映画は始まる。ところが最初の映像は、それは空撮からとらえられた釜ヶ崎、実際は西成区の釜ヶ崎とは区別される、至近の場所にある浪速区の恵美バラックを地上に降り立っての場面という設定ではじまる。しかし実際にみられる映像は、写真2、3のように、バラックのような建物が密集し、どぶ川にかかる橋のかなり向こうに通天閣が見える、しかし決して釜ヶ崎では確認し得ない、橋にかかるバラック住宅の密集する地区からのシーンではじまる³⁾。撮影の都合上なのか、他の理由があるのかは検討していないが、冒頭での釜ヶ崎の不良な住環境を示す視覚的な紹介にあたって、釜ヶ崎そのものではなく、浪速区の恵美でもない場所が使われ、釜ヶ崎の核心部は登場しないのである。そして写真4のように、舞台のドヤは、室内セットと思われる路地にある「ホテル釜ヶ崎荘」であり、1mの幅のないぬかるみの路地であり、建物もバラックに近い粗悪なものに設定されている。しかしこのバラック的状况も、釜ヶ崎そのものの特徴というよりは、図1に見られるように近辺のバラック地帯の状況がより強調されているといえる。これはある意味で昭和30年代当時の釜ヶ崎及びその周辺地区の状況を物語っており、取り巻く空間的な系譜が複雑に絡み合っていることを示している。

写真1～4 「がめつい奴」、千葉泰樹監督、1960(昭和35)年 ©東宝株式会社



写真1

左手は恵美小学校、右手は南海高架、あいだが恵美バラック



写真2

ロケ地は不明。左手方向を臨んだのが、写真3のシーン、遠くに通天閣



写真3

ロケ地不明。写真2の橋が手前、その奥が鉄道高架



写真4

ホテル釜ヶ崎荘の看板、このドヤ内がこの映画の主舞台

この「がめつい奴」と同じく、もうひとつ銀幕で釜ヶ崎のイメージを焼き付けたのはやはり同年8月封切の、松竹制作、大島渚監督の「太陽の墓場」であった。社会への抵抗の形態が、徹底的にアナキーな扇動、かつアナクロな言動、しかも労働を忌避したかのような倦怠感に満ちたうつろな労働者、映画ではルンペンと呼ばれ、そうしたルンペンをあやつり売血や売春、第3国人への国籍売買にかかわる暴力団／愚連隊の充満したそうした描写に、釜ヶ崎やその周辺のバラックがオープンロケでたびたび使われている。建設前の新今宮駅付近の南海高架横、関西線築堤下のバラック地区という昭和30年代前半のセッティングの中で、映画は進行する。そんな中で、いとも簡単に人が殺され、そしてバラックが燃やされる。その退廃的な景観を見事に支えたのが、浪速区の水崎町、馬淵町のバラック地区であり（写真5～11）、あるいは釜ヶ崎側の西入船町（写真14）であった。1933年築の南海高架は関西線をまたぎかつ複々線の巨大な建造環境であり、しかし駅を釜ヶ崎に有さなかったために単なるコンクリートの塊でしかないというその無機的存在は、この映画の背景としてたびたび映し出され、都会にありながら貨物線ほどの認識しかもたれなかった関西線の都会のエアポケット的な存在も、映像を引き立てた（写真10）。とにかくこの「太陽の墓場」では、釜ヶ崎の簡易宿所街ではなく、高架脇の浪速区側のバラック地区が、その物理的荒廃と同時に、精神の荒廃をもイメージさせる格好の舞台として強調されたことである。

写真5～16、「太陽の墓場」、大島渚監督、1960(昭和35)年、©松竹株式会社



写真5

写真10までのロケ地は水崎町、水崎町南海高架西側、関西線築堤から撮影、当時はまだ新今宮駅はない。



写真6

左後景が関西線築堤で、その北側、当時の水崎バラックを寄せ屋、仕切場、小舎に見立てている。



写真7

南海高架下東側の水崎バラック



写真9

背景に、水崎町の南海高架と通天閣



写真10

鉄道標識のある関西線の築堤を横切るシーン、南海高架、背景に通天閣、ここは現在の新今宮駅にあたる。



写真8

南海高架下北側を斜めに走る水崎町の街路。右手奥は中山太陽堂

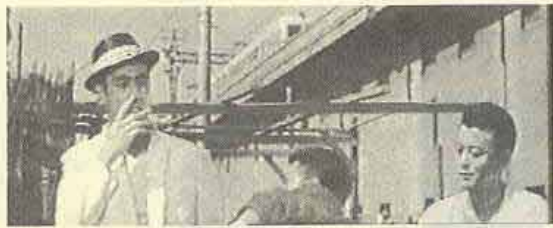


写真11

南海電車が見える馬淵町の南海高架東側、この左側が当時の恵美バラック

「太陽の墓場」は、このようにロケ地のほぼすべてが特定できる。ストーリーの主要な部分である、売血するルンペンを囲い込むバラックは、写真6のように南海高架横で関西線の築堤より浪速区側、すなわち水崎町の築堤横の不法占拠という状況を利用しており、ロケ当時は存在していなかった新今宮駅の構内北側を占拠していた写真7のように水崎バラックであった。また暴力団から焼きをいられる場面は、写真11のように、水崎町の北に接する馬淵町の南海高架横が設定され、写真9のように時おり通天閣が背景に見えるように場面が設定されている。もちろん、背景的に釜ヶ崎の界限のシーンが隠し撮りのアングルから映し出される。写真12のような釜ヶ崎銀座通、写真13の萩之茶屋商店街、実町名がありありと見える写真15のような少年非行や教育困難を思わせるに十分な看板の大写しや、さまざまな露天商や寄せ屋のアップ、そして写真16に見られる三角公園での人買いなどで釜ヶ崎の空間が利用される⁴⁾。しかし主たる現場は水崎町および馬淵町であり、これ

に対して、地域住民がつぎのようにこの映画の制作者に対して抗議している。「九日封切りされた松竹映画“太陽の墓場”は反社会的な不良映画で、しかも大半が馬淵町でロケされているため、我々の町が社会悪の感染源であるような印象を与えている。我々住民は貧困で生活の打開に努力しているが、映画にえがかれているような非人間的な常習犯罪者はいない」（毎日新聞大阪版1960年8月14日）⁵⁾。



写真12

釜ヶ崎銀座（住吉街道）を北に見たシーン、既に戦災復興事業で街路は拡幅されている。写真12、13、14は、映画の本筋とは直接関係のない、思わせぶりの背景シーンである。



写真13

萩之茶屋商店街、まだアーケードはない。



写真15

萩の茶屋、山王と地区名が明確に読める



写真14

現在のセンター横の南海高架を背景に、バラックも見える



写真16

三角公園、右手は当時の南海天王寺線

またラジオ番組ではあるが、やはり同年、1960年5月4日から1週間ごとに25日まで、朝日放送のニュースの十字路「どん底の町釜ヶ崎」は、かくしマイクで、報道部員が1ヶ月取材したものであった。「一泊七十円のドヤ街、食いつめて全国から流れこんだあぶれ者、前科者、売春婦、ポン引、その他雑多な人間で形成される特殊な社会の実態を「日雇の子供たち」「その日暮しの人々」「暴力、売春、麻薬」と三回にわたって放送してきた。近代ビルが林立し、自動車のウズが巻く大阪の一角に、こういう町がある—聴取者の驚き、反響も大きかった」（毎日新聞1960年5月19日）⁶⁾。

こうしたメディアの相次ぐ釜ヶ崎及びその周辺地区への注目に対してマスコミが西成の悪を誇張することをやめてほしいと大阪西成防犯協会=越原利七会長、六百人=では二十四日午後、在阪の映画、テレビ、ラジオ各社を役員が訪れ、協力の要望書を渡した。「西成の悪 誇張しすぎる 防犯協会 マスコミへ要望書」と題して、越原会長らの話によると、「マスコミに描かれる「西成」は殺人事件の死体から着物がはがされたり、交通事故の自動車は警官の来る前に解体されて売りさばかれるなど全くの無法地帯になっている。このため区民の中には就職や結婚話がうまくまとまらなかった例もある。しかしこうした悪が行われているのはごく一部で、二十一万区民のうち、大半は健全な市民生活を営んでいる。しかも一昨年夏、暴力排除区民決起大会が開かれたのをはじめ、地元環境浄化対策委員会が結成されるなど、区民が明るい町づくりと、これまでの汚名返上に一生懸命努力している。マスコミも事実以上に西成を誇張しないで、区民の努力に協力してほしい」（毎日新聞大阪版夕刊1960年12月24日）というものであった。まさしく、ふたつの映画内容をさした地元からの要望であった、それほどインパクトの強いメディアとして作用したのである。

ここで引用したいずれのメディアもが釜ヶ崎を流用する最大の着眼点は、ハード面に限れば、釜ヶ崎およびその近辺に見られる土地所有の不法性とバラックに代表される住環境の劣悪さにある。そして都市病理学的な人間観の横溢についてはいったん棚上げしておくが、当時の周縁的な職業の地理的な局地的集中にあった。たとえば、「がめつい奴」での登場人物を列挙してみよう。ポンコツ屋、解体屋、辻占い、ばくち打ち、ホルモン屋、傷痕軍人、つつもたせ、ヒロポン打ち、くつみがき、あいの子、ヤクザの親分・子分などであり、釜ヶ崎の主演である港湾、建設、土木労働者がほとんど登場せず、職業的に周縁と思われた都市雑業層がこれでもかこれでもかと登場してくる。ある映画批評では、「初見の際は刺戟の強さに幻惑されるが、再見すると底の浅さが判るようなものだ……ちっとも感動が残らないことに気がついた。釜ヶ崎を背景にしながら特異な人間をかみあわせるだけで、娯楽作品以上に出ようとしぬ作者の姿勢のせいであろう。大島渚の『太陽の墓場』との本質的相違である」⁷⁾との辛口評価がなされる。セリフのあちこちで語られる釜ヶ崎イメージの皮相なステロタイプは、最後の場面でのセリフ、「ほな、釜ヶ崎の人間になりなはれ、あそこへ行ったら、食うだけは食える」、「あそこへ行ったら、一生浮かびあ

「がらへん、ええい、釜ヶ崎でもどこでも行くわい」では、釜ヶ崎はここに描かれた特異な人間の集まりのけったいなどうしようもない所でしかイメージされず、当時の釜ヶ崎の社会的地理的本質を考える際に、笑いを誘うコミカルなところがあるというものの、誇張が大きいと言わざるを得ないであろう。

一方「太陽の墓場」では、職業的には、確かに港湾荷役の仲士は登場するものの、メインはある若い売春婦と、彼女を軸にショバ争いをする愚連隊／暴力団であった。ボン引きが役目の組員、人買いされるルンペン、寄せ屋、日雇人夫（台詞で使用されている）、そして売春婦でありながら同時に、売血でビジネスを立てる元軍人といっしょにそこに集まるルンペンを仕切る女主人公、まさにアンダーグラウンドの世界のみがやたら強調されている。しかし邦画では当年の第5位に評価された内容ともども注目された映画であった⁸⁾。現代社会に内在する矛盾が必然的に招来させたところのこのドヤ街、現代社会のゆがみが最も集中的に現われるという認識で、このドヤ街を舞台設定にしたこと事態は評価されることかもしれない。しかし釜ヶ崎という地点から捉え返した場合、登場人物が卑劣で残酷で動物的な行為を自分自身でも平然とやってしまう人間として描かれ、ドヤ街でのうめきや憤り、苦しみという人々の生きざまが見えてこない。あるいは、「大島が戦後十五年を空白として捉え、現在時点を出発点にしようとした意図は万更分らないでもない。しかしそのためにドヤ街をミディアムにしたやり方に激しい憤りを感じるので……ドヤ街を描きながら、ドヤ街をないがしろにした罪は、どうみても救いがたい」⁹⁾。

ここではふたつの映画を取り上げただけであるが、テレビ、ラジオ、新聞のみならず、多くの雑誌や調査でたびたび取り上げられる。この経緯については別稿で述べるつもりであるが、日雇労働者の街という地域の最大の性格に対して、十全な注目が払われないうまま、興味本位、異質なものの排除、偏見、見下しなど、ことさらネガティブなイメージが誇張されるという回路が働き続けることになる。その最大のピークのひとつがこの1960年であった¹⁰⁾。上述の映画封切年やその前年の新聞記事のタイトルをあげても、「西成という町(上) 正に日本の“カスバ” たたいても死なぬ根強さ」(毎日新聞大阪市内版1959年5月11日夕刊)、「西成 底なしの“悪の病巣” “麻薬” で120人逮捕」(毎日新聞大阪市内版1959年5月11日夕刊)、「西成という町(中) 敗残者の吹きだまり」(毎日新聞大阪市内版1959年5月12日夕刊)、「明るくなったか“西成の町” 一向減らぬ“夜の女” そろいすぎる悪への条件 暴力⇄売春⇄麻薬⇄盗犯」(毎日新聞大阪市内版1959年9月12日)、「うっかり車も走れない 人呼んで“釜ヶ崎ドヤ街”」(毎日新聞大阪市内版1959年10月1日)、「朝日放送 反響呼んだ「どん底の町釜ヶ崎」」(毎日新聞大阪市内版1960年5月19日)と、まさに映画に流用されるイメージがメディアにすてに横溢していたといえる。そしてその翌年1961年8月1日におこった釜ヶ崎暴動は、大阪の人々の釜ヶ崎の心象地理をネガティブなものにする決定打となってしまったのである。

ここで、こうした舞台設定を当たり前のもので受け取らせてしまった当時の釜ヶ崎およびその周辺の空間構成について、再び図1、2を参照しながら検討してみよう。大きな街単位の構成要素は、東入船町と東田町を中心とするドヤ街、南海高架横を浪速区から西成区にかけて線状にひろがるバラック街、東の山王であり、飛田を根城とする暴力団の集中するヤマと呼ばれる地区、そして公式にはその存在が認められなくなった元遊廓であり現役の遊廓でありつづける飛田、西には職安のある東萩町付近で、失対の日雇労働者も多く見られるいわゆる職安街という形で空間構成がなされていた。

この空間構成については、形成の時期的背景についていくつか押さえておく必要があることと、いずれも都市発展にとって、決してポジティブには捉えられないような要素を集中的に抱え込んでいることに注意しておかねばならないであろう。すなわちこのような空間構成が、釜ヶ崎そのものだけでなく、その周辺にも複合的に再生産され続け、「底辺」社会の歴史的系譜を有する空間がまとめて再び釜ヶ崎にフィードバックされ、イメージづけられている構図が予想される。バラック街と元遊廓については、映画でも釜ヶ崎の構成要素として強く意識されていた特徴であるが、バラック街の形成については、戦災復興都市計画の事業と密接に関連している。それは、いわゆる都市計画予定地の不法占拠という大阪市中で当時大きく問題になり、特にこの浪速区や西成区では規模の大きさに注目され、不良住宅地区の改良や、福祉施設や寮の建設を導き出した。これは大阪市政からみても前例のない政策を編み出さざるをえない状況を生み出した要因となったことを、あらかじめ指摘しておきたい。後者については、1958年4月の売春防止法の完全施行によるポスト遊廓の混沌状況がもっとも露骨に現れたものであり、この非合法売春をめぐって多くの暴力団が利得を見出し、釜ヶ崎方面で横行する日雇労働者からみの労働手配やノミ行為も重畳して、暴力団の問題と密接につながっていた。こうした要因が映画で凝縮され、それが広く釜ヶ崎の特徴として、人々の脳裏に刻み込まれることになる。

本稿では、こうした要因が集中した歴史的背景について、紙数をさいて述べることになる。なぜ、という疑問を発することは簡単である。なぜこのようなネガティブなイメージの集中する空間が存在しえたのか。1960年前後という当時の現場に密着することで、そうした疑問の解明はひとつ可能となるが、本稿ではその準備作業として、こうした空間の持つ性格の歴史的系譜により注目を向けたい。したがって、以下の章で指摘することは、事実としてはほとんど目新しいものはなく、既に多くの研究で明らかにされていることであるが、ただこうした釜ヶ崎の歴史的過程の説明において、十全には使われてこなかった地図により執着して、今までの事実を地理的空間的により豊かに叙述することを、次章以降の分析課題としている。

3. 絵図に見る城下町大坂南部の「賤民空間」と明治期以降の変容

(1) 江戸時代末期の一葉の絵図から

結論から述べると、釜ヶ崎の今日のありようは、封建時代大坂の都市構造に規定されている部分がある。それは城下町が計画的に有していた身分的周縁社会の地理的な周縁空間への固定であり、城下町大坂の南部はそうした仕組みが極めて強く埋め込まれている場所であった。一般に城下町はその見事な身分的すみわけが計画的に施行されたが、周縁身分でいうと、穢多、非人からなる被差別部落民でありその居住地としての部落、あるいは施設の立地として、遊廓、それとほぼ同義的な新地、芝居・諸芸小屋、墓場、刑場、木賃宿街がそうした事例に相当していた。

こうした被差別的な状況の地理的表現は主に絵図に頼ることになるが、そのような絵図を開示することが、被差別状況を地理的に指摘することになり、過去には無頓着にそうしたものが公開されていたことへの批判、近年では、公開することへの手続きやその反応を恐れての、非差別表示を抹消するか隠蔽するか、絵図そのものを非公開とするという措置が取られがちであった。そうした状況を打開するための企画、すなわち、2001年9月18日から11月4日まで、大阪人権博物館で開かれた、「絵図に描かれた被差別民」の特別展は、本稿にとってもタイムリーな企画であった。筆者もわずかながらこのプロジェクトの企画に関わったが、これまで地理学研究者として絵図の使用にあたり、個人的に、そして地理学のアカデミーとしてどうしても越えられなかった、被差別民の身分記載について、初めて大胆に踏み込み、公開、公刊絵図の中では、「抹殺」されてきた、被差別部落のロケーション、を国絵図から町絵図、村絵図を網羅する形で展示、そして図録として公刊することに踏み切った画期的な企画展示であった¹¹⁾。本稿にかかわって重要なことは、大坂の都市絵図において、もっとも「最大・詳密」であるといわれる1806（文化3）年の「増修改正摂州大阪地図全」が、特別展の図録では被差別表現を一切抹消せずにそのまま掲載されたことにある。今宮、釜ヶ崎やその付近にかかわるエリアの絵図を図4に示してみた。

城下町大坂の南限は、図4では上部の道頓堀のすぐ南に太破線で記している。真ん中には1764（明和元）年に新地造成された遊里の難波新地があり、道頓堀と記した南側には、歌舞伎や義太夫の芝居小屋街、そしてその南には、難波村抱えの千日墓、刑場、長吏、非人集落が存在する。またその東には、日本橋から住吉街道（あるいは紀州街道）沿いに南にずっとのびる木賃宿街の長町が存在する¹²⁾。この部分が城下町大坂で公認の木賃宿指定地区であり、城下町エリアに含まれる特異な市街地形態を示す。この住吉街道は、城下町の南淵を、颯川にかかる名護橋で今宮村内に入る。村内で街道は少し屈曲するが、南に伸びる住吉街道のすぐ東側には、再び七墓のひとつの鳶田墓、そして刑場が現れる。そしてその刑場には非人小屋が存在する。上町台地崖を東にのぼると、この図幅で範囲外となっ

ているが、城下町の空間的コンテクストとは別個の、よりはるか昔より存在する四天王寺の悲田院系統の非人小屋がまた立地する。

一方、目を今宮村の住吉街道屈折部から西に向けると、その道は木津村の村中を通り、大坂城下町周縁に位置する大きな規模を有した被差別部落の渡辺村に至る。その区画だてられた集落には、絵図では穢多村との表記で描かれている。十三間堀川を隔てて、月正島には穢多新家、そして難波島には刑場がまた記される。加えて、難波御蔵とそれに接続させるために掘られた難波入堀は、1733（享保18）年、今でいうところの失業救済事業、当時の救恤事業として施行され、その姿を当地に刻印したことも頭に入れておかねばならない。のびは、こうした被差別民の地理的凝集について、「城下町において被差別集落が偏って凝集して賤民空間ともいべき特異点が形成されることがあると指摘したが、巨大都市大坂でもそれが現出する」¹³⁾という、まさしく当該の空間がこの図4に展開されているのである。明治期以降との関係をわかりやすくするために、図4には、南海鉄道と大阪鉄道（後の官線、関西本線）を加筆している。釜ヶ崎は、図4で住吉街道と記した西側あたりに位置し、そのころは一面の耕地で、街道を隔てて東に鳶田墓が存在する位置関係にあり、のびの言うところの賤民空間としての空間的系譜を有する位置に存在していることだけは事実であった。

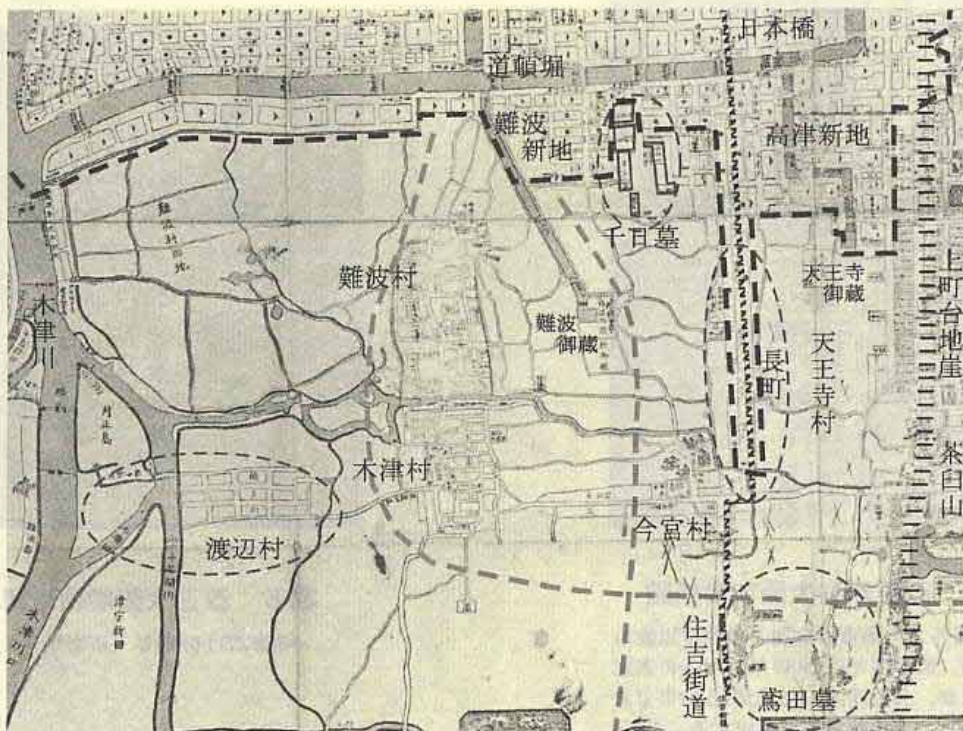


図4 19世紀初頭の大坂南部

文化3年(1806年)刊行「増修改正摂州大阪絵図全」
 (大阪人権博物館 特別展示図録『絵図に描かれた被差別民』2001年所収)に加筆

(2) 明治前期の釜ヶ崎誕生前史

農村的景観として耕地の広がる、難波村、木津村、今宮村、天王寺村が、城下町大坂の南縁に存在したが、日本で最大スケールの賤民空間がこうした4村の存在をベースとして広がっていたのである。この賤民空間の系譜は、明治維新という大きな変革のもとで、どのような変容を遂げたのであろうか。

明治維新を経て、賤民の存在そのものが制度的に解体され、刑場の存在は監獄制度に移行することで物理的に消滅し、墓場も墓所聖などの賤民が消滅することにより存在基盤を失った。図5は、まだ絵図的描写にとどまっているが、1889年ごろ作成の地図で、難波、今宮、天王寺村の各村の状況を示している。南海、大阪両鉄道は既に敷かれているが、「旧千日六坊」や、鳶田の「内院墓」や「刑場埋塚」、「埋葬地」といった墓地、刑場の存在がことさらに目につく形で描かれている。近代的な意味での墓地の集約整理で、この地区においては、後述する図9のように上町台地上の阿倍野墓地として火葬場を併置した近代的墓地が1874年に登場し、避病院もやはり台地上に設置される。その状況は1899年発行の図7でも垣間見られるが、しかし上町台地上の避病院から見下ろす西側の耕地、鳶田には今度は何も描かれていない。



図5 改正新刻大阪市街新図

1889年ごろ。大阪市中央図書館蔵。以後市図蔵と略。図書館では1887年ごろの表記であったが、大阪鉄道の完成が1889年であることから、その年前後と推定する。

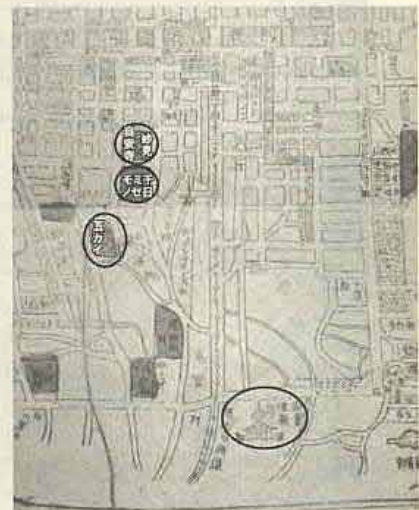
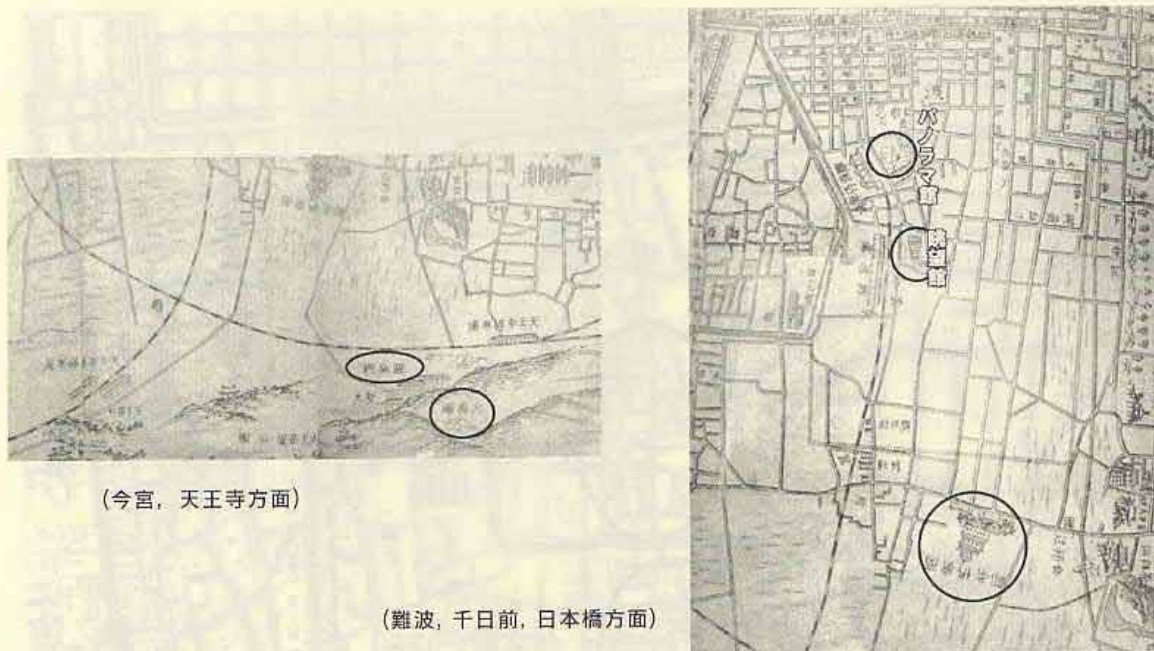


図6 改正大阪明細新図

明治27(1894)年(市図蔵)



(今宮, 天王寺方面)

(難波, 千日前, 日本橋方面)

図7 大阪市明細地図 明治37(1899)年訂正再版 (市図蔵)

目はむしろ、千日墓、千日刑場、そして長町のほうに向けなくてはならない時期であろう。1894年発行の図6では、旧千日は千日ミセモノと記され、難波駐車場の近くには他に眺望館といわれた五階、南に下り、住吉街道の今宮村の角には、今宮商業倶楽部がその洋風建築を誇る。難波新地や道頓堀の芝居小屋街と連動して、近代に入っても遊興空間としての履歴を受け継いでいる。一方木賃宿の長町はどうであろうか。

図8は、1885年内務省地理局による大阪で初めての实测都市図で、絵画的に当時の様子がリアルに再現されている1万分の1の大縮尺地図である。敷地割りや耕地割り、小字名まで確認でき、その意味で、城下町大坂の細部の空間構成もかなり仔細に見て取れる。重要なことは、絵図の図4とほぼ変わらない市街地前線を有し、特に、長町の木賃宿街は、図8において日本橋筋3～5丁目に当たるが、うなぎの寝床式の間口の狭い奥行き深い敷地割りが明確に捉えられることと、その敷地裏は耕地のままであり、裏路地などはまだ形成されておらず、またその市街地前線は城下町当時と変わるところのない状況が確認できることである。また千日墓跡がその機能を喪失して20年後に、当時の面影を残す形で描かれている。1889年の市町村制施行直前ではあるが、当時の大阪市の境界線を太破線で引いている。この境界線も城下町当時の市街地前線と一致する。図8では残念ながら釜ヶ崎付近の状況は、地図の作成範囲外でうかがうことはできないが、江戸時代の賤民空間の物理的系譜はほとんど変化せず、市街地化はまだ進行していなかったことがわかる。

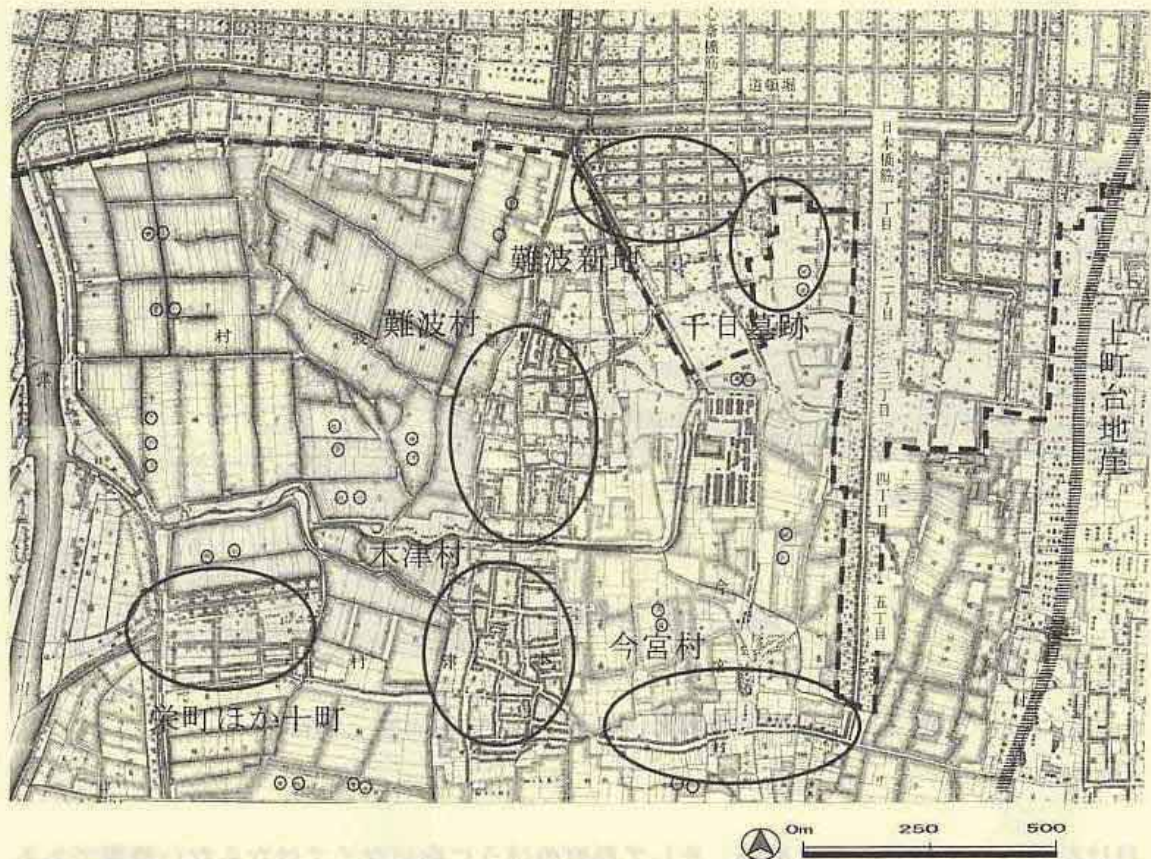


図8 1880年代の大阪南部

内務省地理局製版1万分の1「大阪実測図」1887年製版に加筆

一方ほぼ同時期の1885年から86年に作成された図9は、図8を作成した内務省地理局に取って代わり、その後地図作成の唯一の機関となった帝国陸地測量部作成の2万分の1の地図である。物理的な市街地の状況は図8とほとんど相違はなく、城下町当時の市街地前線が描かれている。また1889年の市町村制施行に伴う、関係村の村界もあわせて実線で描いた。市街地拡大の様相はまだ見られないが、しかし2本の鉄道の開通と言う大きな変化があったこと、そしてこの鉄道の存在が、後の釜ヶ崎の形成に決定的役割を果たしたことについて検討してみよう。

大阪鉄道の手により、その後官線の関西本線となる鉄路は、1889年に奈良方面から天王寺を経て湊町駅まで敷設される。ちょうど鉄路は、当時田んぼや畑の広がる東成郡天王寺村、西成郡の今宮村、木津村を横切るが、3村にとっていずれも本集落がそれぞれ現在の四天王寺付近、恵美須町、大国町あたりに位置していたため、本集落を北部にして、耕地のみの中南部は、この鉄路によって真っ二つに分断されることになった。加えてこの鉄路は、1885年にすでに敷設されていた地平を走る阪堺鉄道（現南海電車線）を乗り越えねばならず、そのために切り通し形態にした天王寺駅方面から掘り取った土砂を利用して、築堤が西に延々築

かれることになる。その交差部分に駅が設けられることもなく、今宮、木津両村にとっては、南北の見通しを遮ってしまう見事な物理的な障壁ができてしまうことになってしまった。これは逆に切り通しという形にはなったが、天王寺村においても事態はほとんど変わらなかったといえるほどの大変化であった。

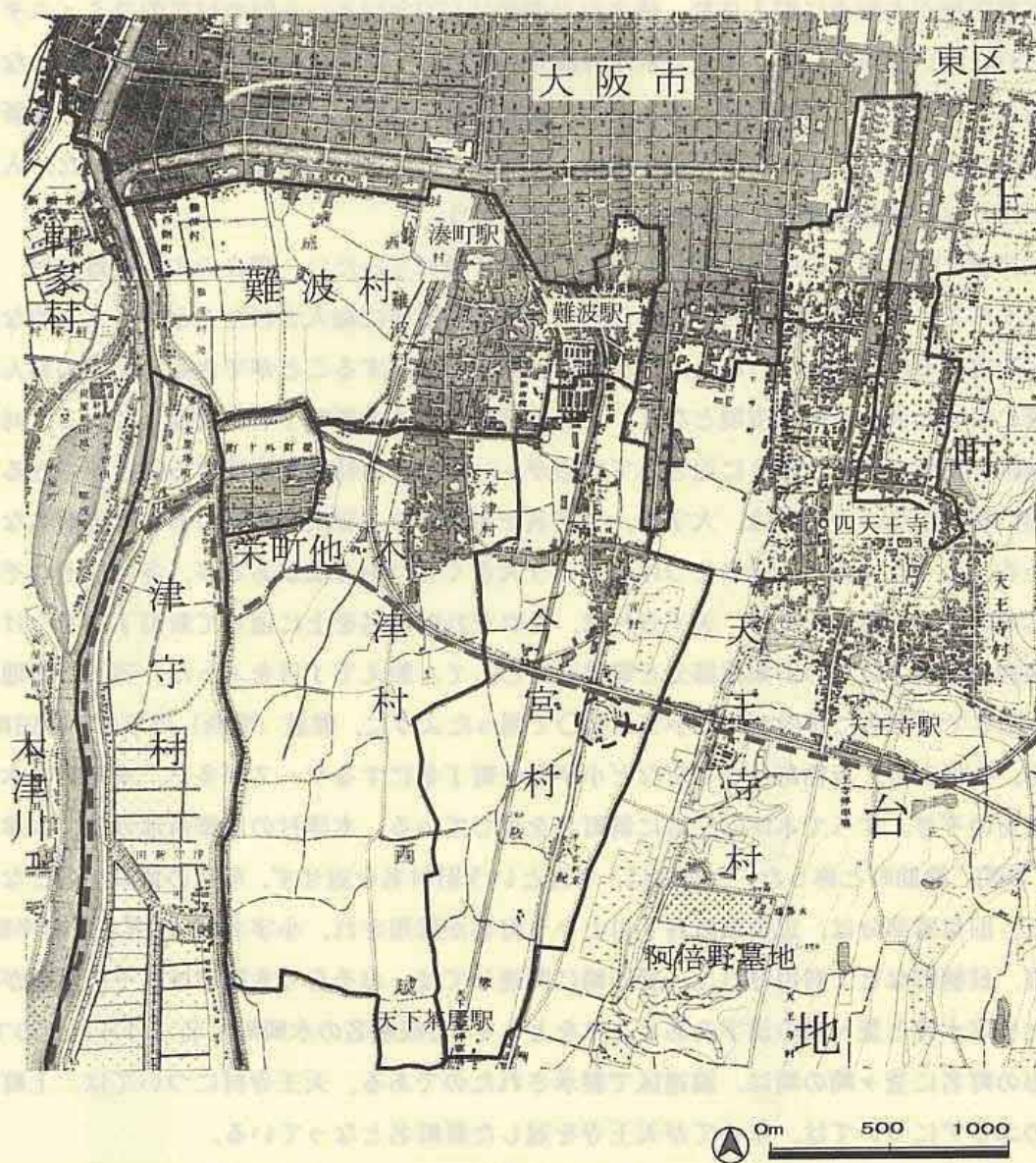


図9 1880年代後半の大阪南部

帝国陸地測量部1886年測図2万分の1地形図「大阪」「尼崎」「天保山」「天王寺村」ただし、「天王寺村」の図幅は1898年修正（鉄道補入のみ）

そして事もあろうに、何の歴史的な由来もないところに敷かれたこの鉄路が、1897年には大阪市の郊外町村の第一次編入により、南の市境に利用されることになる。この編入は、図9の左端に記した三軒家村などを含む現大正区、そして港湾地帯の現港区や此花区も一挙に

大阪市域とする大規模な合併であったが、今宮村、天王寺村は、北部の豊崎村や中津村などと同じく、きわめて市街地に近いところでありながら市外であるという存在に、逆に、最も大阪市に近い村落として日本第二の大都市とかたや一近郊村落という大きな格の違いをこの鉄路によって生み出されてしまうという運命に遇したのである。この合併により両村とも北部の本集落域が大阪市に編入され、残された南部は170余戸という何の村落的コミュニティ基盤を有さない空間として、加えて木津村部分も併合して新たに今宮村として再出発しなければならなかった。大字は今宮と元木津とで編成され、わずかに紀州街道ぞいに字今宮新家の家屋群が、波線内で示した鳶田墓の残址、木津村の墓地のみが確認できるといった、人家のほとんどない状況を図9にみてとることができよう。

ここで釜ヶ崎の地名の問題に関わる変化について触れてみたい。図9のように難波村、栄町他のすべて、今宮村、木津村、天王寺村の一部が大阪市に編入されたことで、大々的な新町丁名を定める作業が行なわれた。その状況を図10で確認することができる。図10の真ん中を東西に引いた太灰色線が市境となり、その北側には多くの新町丁名が登場している。同範囲の地区の元の小字名は図8に記されているが、いくつかの特徴を指摘することができる。一般的に新町丁名のつけ方は、大字名、小字名を利用する、歴史的由緒のある汎称地名などを用いる、まったく新しく佳名をつけるという大きく3つの方法があるが、各村はそれぞれの対応をみせる。難波、木津、天王寺村は、それぞれ旧村名を上冠して新町丁名をつけたが、難波村の場合はその旧集落部分を難波元町として、加えて丁目をふった。残った耕地部分は、図8で新町名に採用された小字名を○で囲ったように、難波(東西)円手町、神田町、塩草町、久保吉町、反物町、立葉町など小字名を町丁名にするケースが多い。木津村は木津北島町をのぞき、すべて木津○○町に新町名を付している。木津村の旧集落部分は、木津大國町、鷗町、勘助町と称した。今宮村は、今宮という旧村名を冠せず、単独の新町丁名となっている。旧集落部分は、恵美須町各丁目という町名が採用され、小字名は、(南北)高岸町、関谷町、貝柄町などで利用された。釜ヶ崎に関連しては、おそらく大阪市域にその北辺がはいった小字水渡と釜ヶ崎の漢字のあとさきをとって、合成地名の水崎町と名づけられたので、大阪市の町名に釜ヶ崎の崎は、浪速区で継承されたのである。天王寺村については、上町台地下のエリアについては、すべてが天王寺を冠した新町名となっている。

いくぶん長々と各4村の大阪市編入後の町名創出パターンおよび多くの小字の消失について述べたが、これは後年の釜ヶ崎の地名消失を特殊化しないための作業である。そしてここで生まれた町名エリアが、1900年代以降の大阪市の資本主義的都市発展による市街地化の最初の争闘地となる。

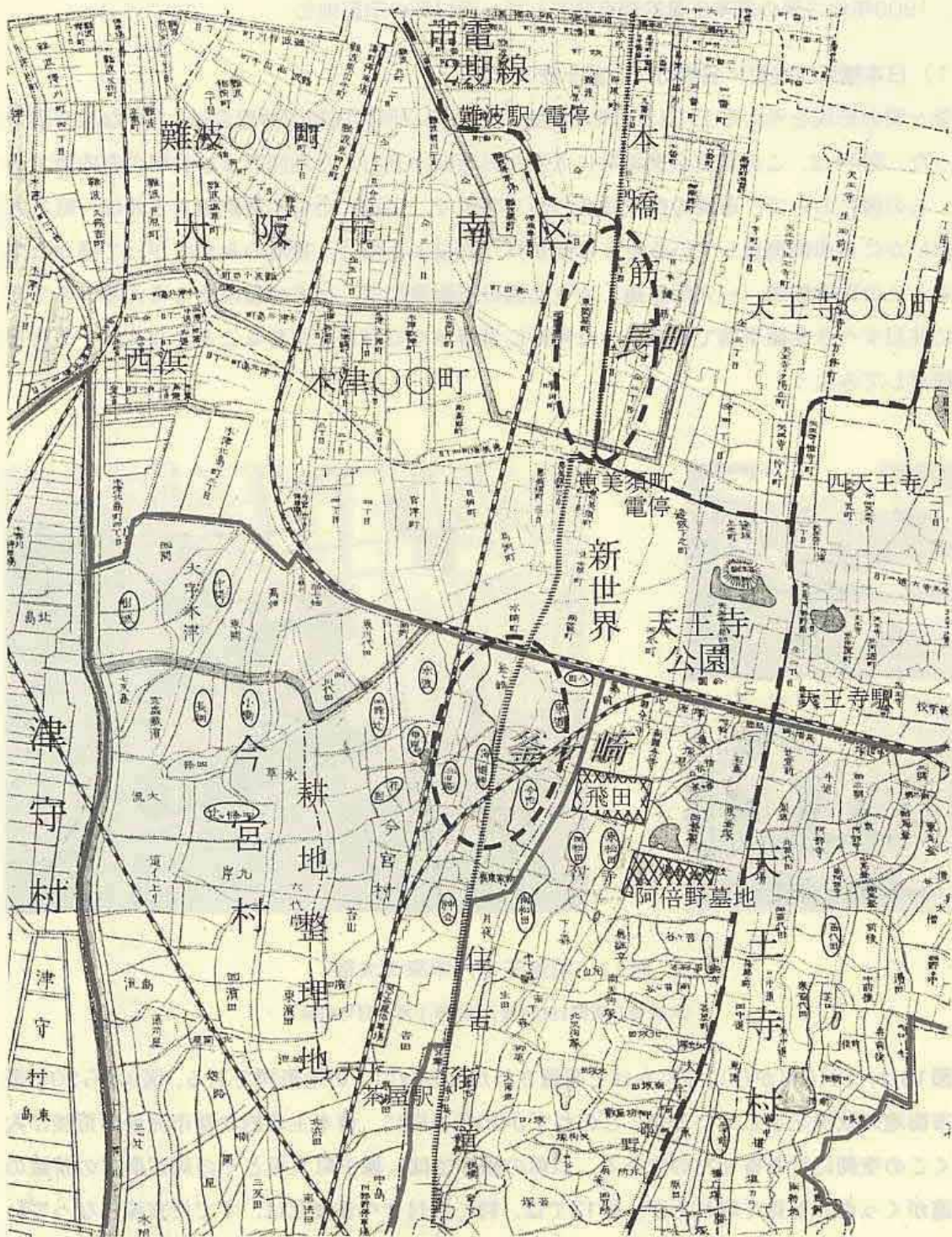


図10 明治末期大阪南部の地名

吉江集画堂地籍地図編集部編『大阪地籍地図全三編』，吉江集画堂，1911年所収掲載図に加筆。町丁，小字界は原本の刷りが不完全で，左に少しずれて印刷されている。

4. 1900年代以降の資本主義的都市発展と釜ヶ崎付近の市街地化

(1) 日本橋筋（長町／名護町）と釜ヶ崎

釜ヶ崎の形成を考える上で1903年に開催された第5回内国勸業博覧会は、大きな出来事であった。図11は、この博覧会開催時に大阪毎日新聞が刊行した地図および会場の案内図である。この図において、市境の存在はきわめて明瞭で、東西に走る関西鉄道より北は、町名入りのいかにも市街地化しているように描かれ、鉄道より南は、耕地のみが広がって描かれている。この関西鉄道（←大阪鉄道）より北側の市街地化は、日本の都市化を考えるうえで非常に注目すべき先駆事例であり、また同時に当時多くの目が注がれることになる。その背景を検討してみよう。

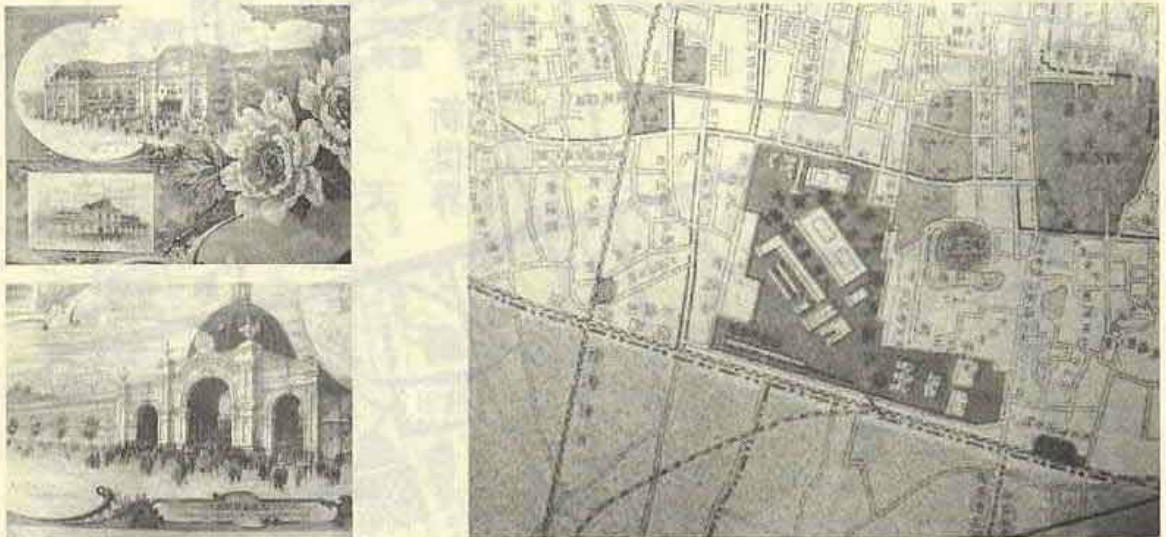


図11 明治三十六年来の大阪

(大阪毎日新聞1903(明治36)年1月1日号付録)

図13は、1910年から11年にかけて測量された2万分の1の地形図である。図9から20年後の市街地の状況を示しているが、このわずか20年の間に、資本主義的な都市発展の荒波が大きくこの空間に打ち寄せたのである。以前の図9では、城下町大坂とその周辺農村の景観の相違がくっきりと見て取れたが、図13では、特に注目すべき変化は、すでに官線となっていた関西本線の内側で、それまで耕地であったエリアが軒並み市街地化していることである。ふたつの白色破線楕円のうちの右側は、長町の系譜を有した日本橋筋の南に延びたひと筋の市街地のあったところであり、その東西両側の市街地化によって、地区は連担市街地となっている、また西側の破線楕円は、図9では難波村の耕地であったが、ここもほぼ市街地化されている。



1902(明治35)年



1905(明治38)年



1907(明治40)年



1911(明治44)年

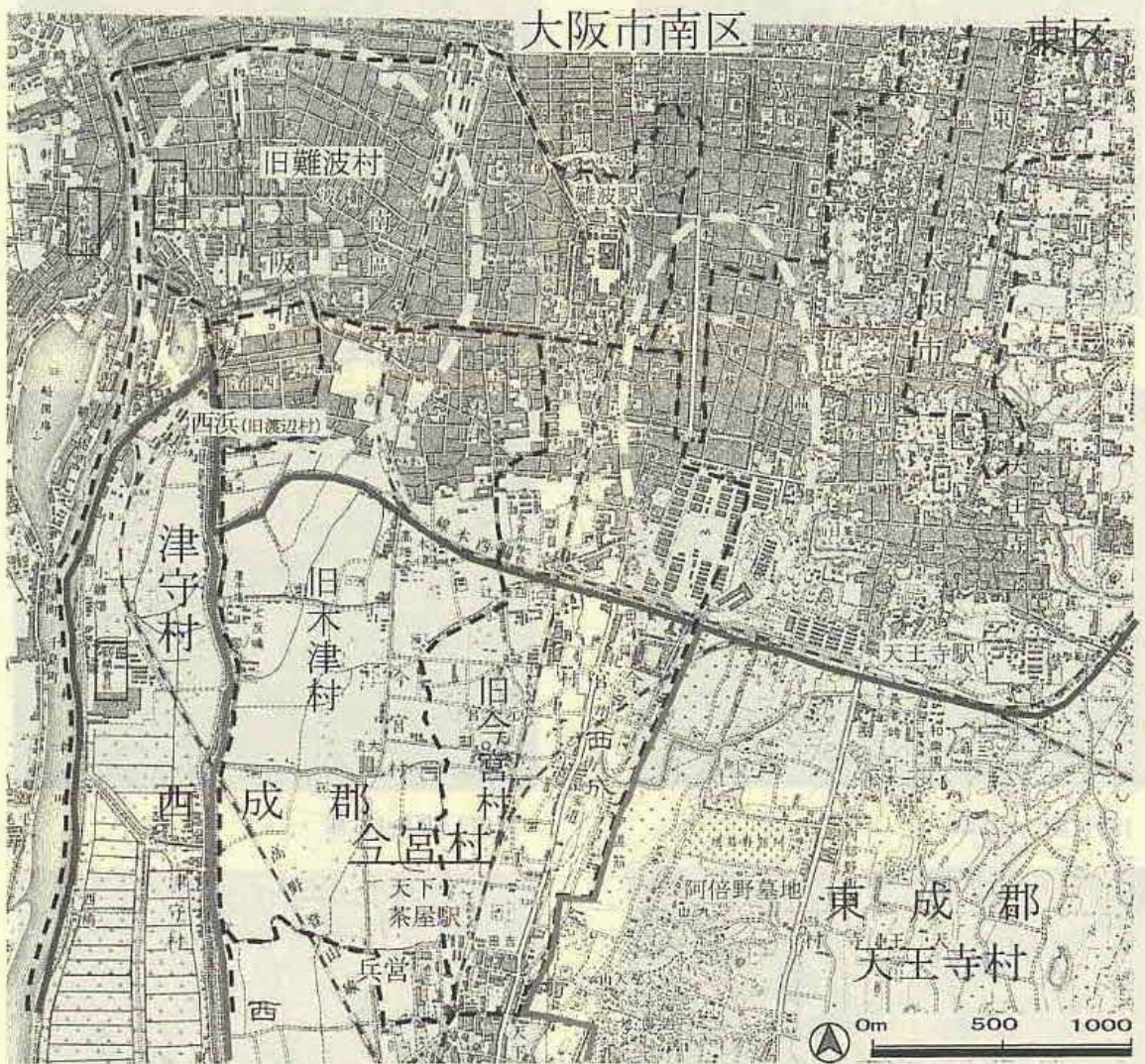


1918(大正7)年



1919(大正8)年

図12 実地踏測大阪市外全図 (和楽路屋各年版)



----- 1897年の第一次大阪市編入までの市町村界 ————— 1897年以降の市村界

図13 1910年代はじめ、明治末期の大阪南部

帝国陸地測量部 2万分の1 「大阪西南部」 1909年測図、「大阪東南部」 1908年測図に加筆

この市街地化は、日本の都市化、工業化を考える上で、きわめて画期をなすものであり、重要かつ重層した要因がその原動力となった。都市化という観点からすると、ここに見られる市街地化は、宅地開発目的の耕地整理が本格的に施行される以前の自然発生的市街地形成の典型事例であり、後知恵的に言えば、「都市計画暗黒時代」の無秩序的な市街地を酷評されるそうした市街地が物理的に形成されたのである。図13の特に西側白色破線楕円のエリアの街路網は、図9で見られた耕地のあぜ道が、あるいは図8の耕地の区画からそのまま市街地化した様相をよくあらわしている。

大阪の工業化については、大規模鍾紡績工場がその牽引車であったが、図13の西側にはいくつかの紡績工場や寄宿舍が見て取れる。まさしく当時の日本全体における本格的工業化の主演がこの図幅に登場している。と同時に、大阪市域に編入された旧木津村や旧今宮村、旧天王寺村エリアでは、明治20年代中ごろから急速にマッチ工業が勃興し、また旧渡辺村の西浜も、日露戦争の軍需による皮革工業の躍進により、労働者をこの空間に引き寄せることになった。

また横山源之助の『日本の下層社会』（1899年）、鈴木梅四郎の『大阪名護町貧民窟視察記』（1889年）や大我居士の『貧天地大飢寒窟探検記』（1893年）などで、江戸時代からの職業的周縁性の系譜とその残滓がルポルタージュの中で指摘されつつ、明治以降の変化があいかわらず下層、周縁社会として発見され描かれつづけた、日本橋筋における都市雑業層の人口増も、この市街地化に反映されていた。その市街地化は、1899年刊行の既に見た図7において、以前日本橋筋の両側に見られた耕地が特に西側ではなくなり、東側でも少なくなっているのは、こうした上述のような労働者、都市雑業層の増加が市街地化を促した結果といえよう。

1903年刊行の農商務省の『職事情』は、当時の小規模工場の労働状況を知ることのできる非常に貴重な報告書である。たとえば今宮のマッチ工業の記述では、「燐寸工場ハ多クハ市街ニテモ所謂町端二位シ貧民部落ト相遠カラサル」と指摘し¹⁴⁾、工業化による工場労働者と都市雑業層の混交した労働者層の増加が、こうした市街地化を作り出したその典型事例となっていたのであった。そしてこのような明治期の都市化の最先端を走るようなこうした市街地が、日本で最初の「細民調査」のターゲットエリアとなるのである。1年前の東京に続き、1912年に内務省が企画した細民調査は、こんどは難波署管内の旧難波、木津、今宮村、天王寺村、そして西浜地区をその対象としたのである¹⁵⁾。

加えて指摘せねばならないことは、図13では、東側の白色破線楕円内の南に立地する軍用地となっている、この後すぐに新世界となるエリアの存在である。その推移は図12の博覧会場敷地の変化に見るとおりである。そこは既に図11で触れた1903年に開催された第5回内国勸業博覧会の会場跡地であり、このビッグイベントも当地の市街地化に大きな影響を及ぼしたのである。そしてこの市街地化に関連した長町＝日本橋筋3～5丁目をめぐる、市街地改造、都市開発のさまざまな動きが、釜ヶ崎の形成とかなり密接に関連した。

市街地改造という言葉の響きは、現代的な意味でとらえると誤解を与えるかもしれないが、この日本橋筋3～5丁目にいたるエリアの住民の社会的周縁性を背景にもした木賃宿街の物理的劣悪さにたえず目が注がれ、1880年代中ごろから、1903年の内国勸業博覧会の開催をピークとして、釜ヶ崎の成立につながる市街地改造をめぐる議論や実行が見られることになる。この釜ヶ崎の成立という点に絞れば、その経緯を的確にまとめている木曾は、釜ヶ崎や「日本橋方面」のスラムが、明治前期まで大阪で最大のスラムであった名護町を起源とし、

その「[名護町] スラムの排斥」によって成立したと述べている¹⁶⁾。その論点は、①「長屋建築規則」(1886年5月)と「宿屋取締規則」(同年12月)による名護町の部分的クリアランスと木賃宿および住人の周辺地区への移動、②「宿屋取締規則」を改正した「宿屋営業取締規則」(1898年)で「木賃宿ハ大阪市堺市(並松町ハ除ク)ニ於テ営業スルコトヲ許サス」(第32条)と規定されたことにより、1897年の大阪市の市域拡張にともない、市境となった関西鉄道より以南に木賃宿が立地せざるを得なかったこと、③1903年の第5回内国勸業博覧会(1903年)の会場が上述の地に決まったことにより、そこへ通じる要路としての日本橋筋の拡幅と周辺スラムの「除去」が唱えられたこと、の3点である。

①については、1899年作成の図7の地図がその経緯を裏付けるかもしれない。1910年ごろの図13で日本橋筋3～5丁目の両側で市街地化が見られたが、その10年ほど前に、すでに日本橋東筋と記されたあたりの市街地化が進行しているそのエリアが「木賃宿および住人の周辺地区への移動」という記述を裏付けることになる。すなわち明治20年代後半から30年代にかけて、「スラム」の膨張が見られたことである。

また③の記述については、図13の東側白色破線楕円内の難波駅より東南へそして東、そして堺筋へと見られる他より太く描かれた街路の拡幅にそれは証明されよう。そして②については、図13の釜ヶ崎部分を拡大した図16により、木賃宿を核とした市街地化が、住吉(紀州)街道の東側、小字東道で、そして関西鉄道築堤の南の、紀州街道より西に平行して伸びる道路にそって小字釜ヶ崎に描かれていることで確認されよう。

このことは、1910年に見られるいくつかの新聞記事で裏付けられる。「市に接近せる郡部即ち鷺洲村、長柄、今宮等には多数の木賃宿あり各種の労働者、……有らゆる浮浪生活をなせるものが一夜六銭乃至八銭位の宿料にて泊り込めるもの毎夜二三千人に上れる由なるが彼等の内には前科者多く殊に今宮、天下茶屋の一部落には備前屋、平野屋、堺屋、日吉屋、春來座、玉屋、尾張屋、三笠屋、京屋、泉屋、鶴屋、三河屋など称する間敷其の他の設備割合に大きな木賃宿がズラリと軒を並べて別天地を画」(『大阪朝日新聞』1910年2月4日)している。

加藤は、釜ヶ崎の成立について、長町の住民が、「放逐」され、「追払はれ」、「追ひ出され」た理由が「警察と電車」もしくは不明であるものの、いずれも博覧会による道路の拡幅や「矮屋」のクリアランスをその理由としていないこと、そして、理由はどうであれ「追払はれ」「追ひ出され」た時期は、1904～1907年(あるいはそれ以降)であることは共通している」と述べている¹⁷⁾。その論拠を、「…最近ノ調査ニ依レハ此等四十八軒カ有スル室数総計一千六百七十八、宿泊人口四千百四十七ニ達ス一夜泊リノ客ハ極メテ少ナク(毎日約百人位)他ハ悉ク定客ニシテ長キハ明治三十七[1904]年当地木賃宿ノ創立以来ノ者モアリ(約百人位)…」という叙述に求めている。

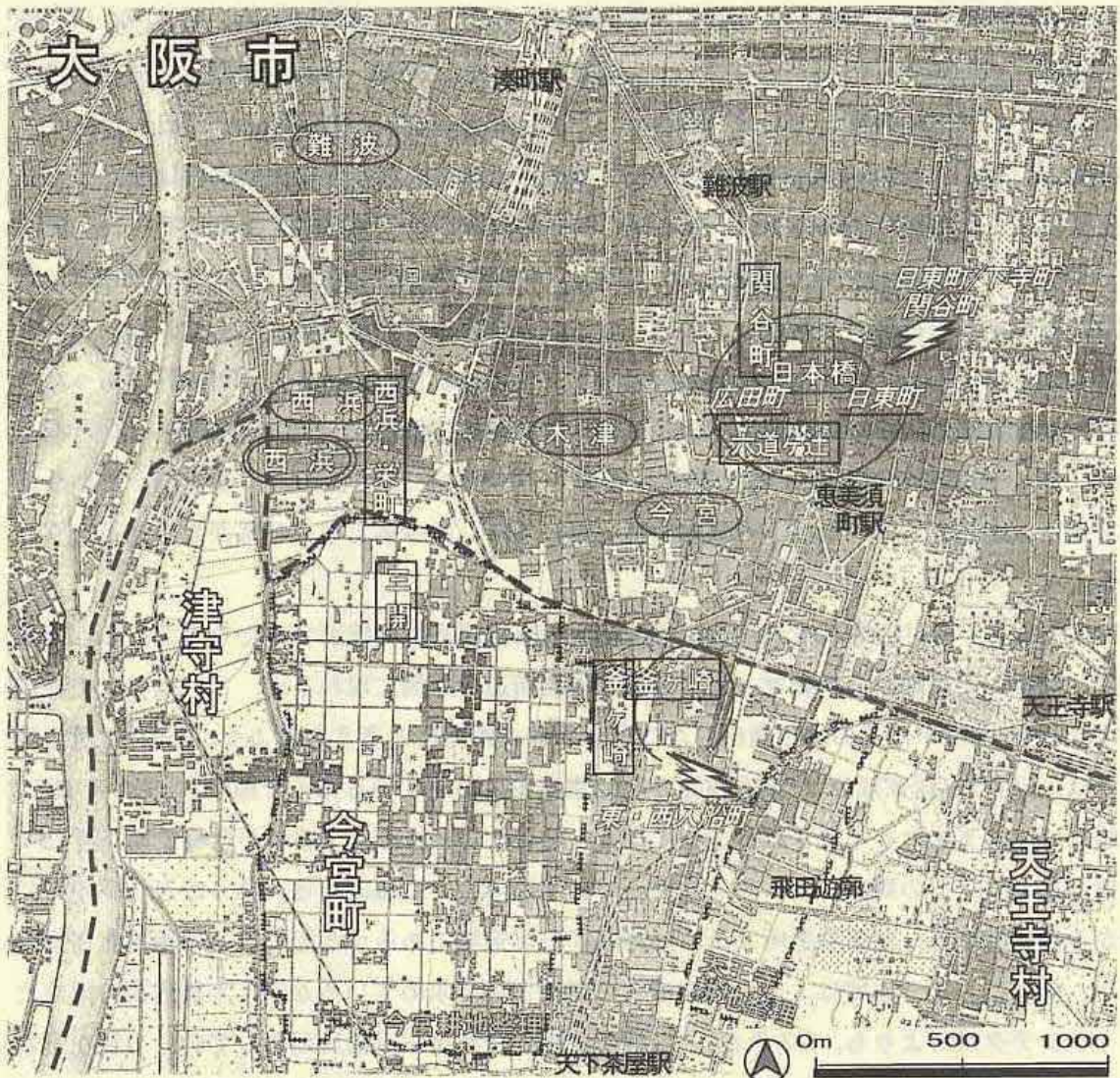
加藤は引き続き、「天下茶屋より今宮に互れる昔の処刑場にて名高き飛田に二十余軒の木

賃宿ありて毎夜大阪市内に入り込める下等労働者、物乞などの連中が宿泊し居る…」(『大阪朝日新聞』1910年2月25日)とか、「昔の刑場でなだかい飛田、今は西成郡今宮村の住吉街道に面して木賃宿が何軒となく並び居れり」(『大阪朝日新聞』1910年10月24日)というよう描写を引用し、1910年には間違いなく、「飛田」と形容される地に木賃宿街は成立しているとする。これは明らかにのちに「釜ヶ崎」と称されることになる地区を指している。図16の上図は、1911年前後の釜ヶ崎近辺の小字名とその範囲を描いたものであるが、鳶田は、鳶田墓に由来する汎称地名であり、この図にも当時まだ残っていた墓場とともに、鳶田という地名も記されている。このように認知度は高く、そのまま鳶田と称される可能性はあったものの、加藤が確認している1914年4月13日の『大阪朝日新聞』の「今宮の惨事」という記事において、「西成郡今宮村釜ヶ崎木賃宿南堺屋」での事件を伝えており、「釜ヶ崎」という地名を使用の端緒として、以後、木賃宿街釜ヶ崎、あるいは今宮という呼称が流布するようになる。

図12は、釜ヶ崎付近の1902年以降の変遷を、和楽路屋刊行の地図でみたものである。1902年版に初めて市街地が今宮新家という名称で住吉街道の東側に現れるが、これはマッチ製造の電光社が1896年にこの地に進出したことによる市街地化と考えられよう。1907年版の地図では、その今宮新家部分は、散在家屋から密集家屋に移っている様子で描かれ、そして1911年版には燐寸工場として記されることになる。同時に釜ヶ崎という地名が登場する。図13では電光社およびその周辺にみられる住宅については明らかに確認でき、もうひとつ字甲岸に広がる市街地では、煙草製造所とそれに関連する建築物であろうと思われる市街地化が描かれる。前者について本間は、釜ヶ崎の成立の契機として求めているが¹⁸⁾、木賃宿街の成立というコンテクストよりも、「スラム」、当時の表現では後述する細民窟としての、当初から水準をかなり下回る住環境を有したエリアとして捉えた方がより事実に近い解釈ではないかと思われる。もちろん釜ヶ崎およびその近辺は木賃宿街と不良住宅をベースにした工場労働者、都市雑業層の居住地というふたつの性格を同時に併せ持つものであったことも事実であった。

(2) 今宮村から「大大阪」市西成区へ

このように明治末期に地図にも登場するようになる釜ヶ崎およびその周辺地区は、たとえば図12では、釜ヶ崎の地名が地図初登場した1911年版には、博覧会跡地の軍用地の一部が天王寺公園となり、ちょうどその年に新世界が誕生する。1918年版の地図では、関西線以南は1911年版と同じ市街地が描かれているが、新世界や市電路線がくっきりと描かれ、そして翌年の1919年版では、関西線以南は全面的に書き改められ、耕地整理で整備された今宮村あらため人口5万人に達しようかという驚異的な人口増を見せる今宮町の市街地が描かれる。1911年にはまだ1万人にも満たなかった今宮村がこのような人口激増を経験す









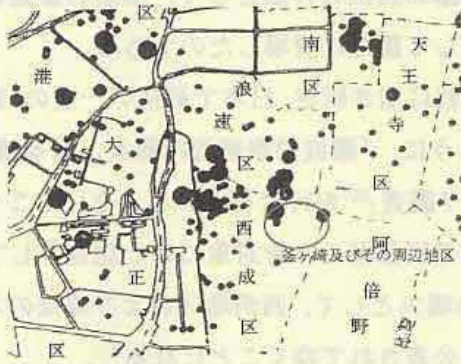
-  1912年内務省実施の「細民統計調査」の対象地区名
-  1916年府警察実施の「部落台帳」調査対象エリア 1897年から1925年までの大阪市の境界線
-  1921年内務省実施の「細民集団地区調査」の対象地区名 (図幅外に他1地区)
-  1922年大阪市実施の「密住地区居住者の労働と生活」の対象エリア
-  1930年代大阪市実施の「過密住宅地区調査」の対象地区名 (図幅外に他2地区)
-  1937年大阪市実施の「密住住宅地区調査」の対象地区名 (図幅外に他2地区)

図14 釜ヶ崎及びその周辺地区における戦前期社会調査の頻度とその位置

1万分の1地形図「大阪南部」1921年測図に加筆



1937年調査



1954年調査



1910年 「大阪西南部」「大阪東南部」2万分の1地形図より



1921年 「大阪南部」1万分の1地形図より



1929年 「大阪南部」1万分の1地形図より

図15 戦前、戦後の不良住宅地図分布図
大阪市役所『大阪市戦災復興誌』1958年所収 第23、24図に加筆

図16 釜ヶ崎及びその周辺地区の地名の変遷

るそのインフラ的裏づけはこの宅地開発目的の耕地整理にあった。天下茶屋駅西側のロシア人捕虜収容の兵営（図13参照）の跡地利用を促進するためにも組織された今宮耕地整理組合は、第1期工事は1912年、第2期工事は1920年に完成し、図14に見られるような見事な碁盤目の市街地が登場した¹⁹⁾。1918年に開廓した飛田遊廓をはさんで天王寺耕地整理組合も、図14のように山王方面の市街地を同じ手法で整備することになる。

良好の市街地の形成という観点からみればこの今宮や天王寺の耕地整理で整備された街路は、基本的にあぜ道を直線化した4m未満の狭小な街路網からなり、正方形の大きな区画は街区内に行き止まりや路地を生み出さざるを得ないそういう水準のものであった。したがって上モノに充実した資本が投下されない限り、良好な住環境が保証されにくいインフラであった。この点に着目すると、関西線をはさんで南北の市街地基盤は、北部が自然発生的なものであったのに対して、南部は一応は計画立ったものになったが、引き続き不良な住環境という点に着目すると、図14のようにこの地区には問題エリアとして注視の目が向けられ続ける。そしてこの耕地整理エリアは、北接する被差別部落の西浜の外延として、部落の膨張の受け皿となり、西成区北部は日本最大の被差別部落として新たに登場したのである。

既述したように1912年に内務省は、前年の東京の調査に引き続き、日本で最初の一連の「細民調査」を実施したが、大阪では、図14にも記したように、「難波警察署管内難波、日本橋、今宮、木津、西浜等ノ地域ニ居住スル細民一部ノ状態ヲ調査」²⁰⁾を行なっている。そしてこうした一般の細民調査から切り分けられてゆく形で、被差別部落のみを対象にした調査として1916年から実施された大阪府の部落調査があり、その嚆矢として、西浜地区および隣接の木津北島町が選ばれる。調査結果は「部落台帳」として公表されてゆくことになる²¹⁾。

引き続き1921年には六大都市を対象とした内務省社会局の『細民集団地区調査』が、東京、大阪で3箇所、その他の4都市で2箇所ずつ、計14箇所を対象にして行なわれる²²⁾。各市の裁量で、多くの細民が居住していると思われるところが選ばれる。大阪の場合には、図14にあるようにほぼ広田町をさす「六道ヶ辻」、小字の釜ヶ崎のほぼ全域、八反田全域、東道の一部、そして甲岸のごく一部を対象とした「釜ヶ崎」、そして市北部の「長柄」の3箇所であった。ここで釜ヶ崎は調査対象地区としてもその地名を名立たるものにしたが、その後もこうした社会調査は相次ぐ。一連の大阪市社会部の調査報告では、1925年の『密住地区居住者の労働と生活』で、日東町、広田町が、1930年ごろの『過密住宅地区調査』（大阪市大学術情報センター関文庫蔵）では、市内5箇所のうち、「日東町・下寺町・関谷町など」（実際は広田町も入っている）、「東入船町・西入船町」が、そして1937年の『本市における密住住宅地区調査』では市内5箇所のうち「釜ヶ崎」、「西浜・栄町」、「三開」が選ばれる。この「釜ヶ崎」とは東・西入船町、海道町、甲岸町、東四条であった。

図15の上図は、1937年に行われた大阪市全市にわたって大阪市社会部が実施した「本市に於ける不良住宅地区調査」の結果の一部を図示したものである。確かに日本橋から難波、西

浜、そして三開方面（図14参照）に著しく不良住宅が集中しているが、釜ヶ崎及びその周辺地区に関しては、それほど大量に分布しているわけではないことが判明する。しかしながら釜ヶ崎は、何度も社会調査の対象地として選ばれ続ける。こうした調査ばかりでなく、釜ヶ崎には他地区に比べると多くの社会施設が導入された。住宅に関しては大阪では最初の1927年施行の不良住宅地区改良法の適用による3階建ての今宮アパートが東入船町に建設されたが、これは釜ヶ崎における住宅改良ではなく、日本橋筋東の日東町地区の不良住宅改良事業の施工に伴う居住者の一時立ち退き先として1929年に竣工したことを付言しておく²³⁾。

さて、図16で確認しておきたいが、1910年当時の字界については既に説明した通りであり、わずか10年ばかりの後の1921年の地図では、すっかり市街地と化した。地図には釜ヶ崎や甲岸、海道、東道、国分寺、四条ヶ辻などのいくつかの字名が記されているが、耕地番号でしかない番地は住宅地では役に立たず、耕地整理も完成し、早晩の新町名導入は必至であった。釜ヶ崎という地名の消滅に関して諸説、があったなかで、小柳がはじめて指摘したことであるが²⁴⁾、1922年4月1日より東入船、西入船などの町名が図16のように導入されたことは、「大阪府公報」919号からも明らかである。南部方面は、梅、松、橘などの佳名がつけられるが、釜ヶ崎近辺では、甲岸、海道、今池、花園、四条などの小字名がそのまま用いられ、東田町は東道と八反田の合成地名となり、旧天王寺村域は、もともと鳶田墓や刑場があったことも関係してか、それにまつわる小字名が多かったが、それらはすべて採用されず、山王という町名が導入された。鳶田という汎称名は、飛田遊廓や駅名には引き継がれている。この新町名導入において、釜ヶ崎という小字名が廃止された理由は判明していない。戦後在日の多く居住する大阪市生野区の猪飼野が住居表示の導入で桃谷になったような先例として釜ヶ崎という字名が忌避されたのかもしれないが²⁵⁾、多くの小字名は消えるのが一般的であるということも指摘しておきたい。

地図上では、市販の地図などでは、1923年の消滅以降も使われてゆく事例が見られる。たとえば図17などは、赤字で「通俗町名」をわざわざ刷りながら、釜ヶ崎は黒字で一般町名のごとく東入船町や西入船町と並んで扱われ続けている。通俗町名については、飛田や天王寺駅近辺の小字名がそのような扱いを受けているのはわかるとしても、日本橋筋の両側に名護町、長町が通俗町名として残されていることも指摘しておかねばならない（この版の地図では、戦後の1958年版までこうした通俗町名が刷られ続けた）。またこの図17で、細民地区の区名異動も行われている。特に日本橋筋の東側の日東町などは、天王寺区から浪速区へ。そして日本橋筋も南区から浪速区へ、そして山王町も今までの住吉区から西成区に異動し、住吉区側の天王寺方面は、阿倍野区と称されるようになる。戦前の細民地区は、こうして1943年に至り、浪速区と西成区のみが引き受けることになった。

1926年のとある文章は、「汽車は浪速区と西成区の境界線を走って釜ヶ崎の北側に入ると木賃宿の棟は大きい、地下足袋を頭辺に置き汗と油で冷たく重いせんべい布団にくる

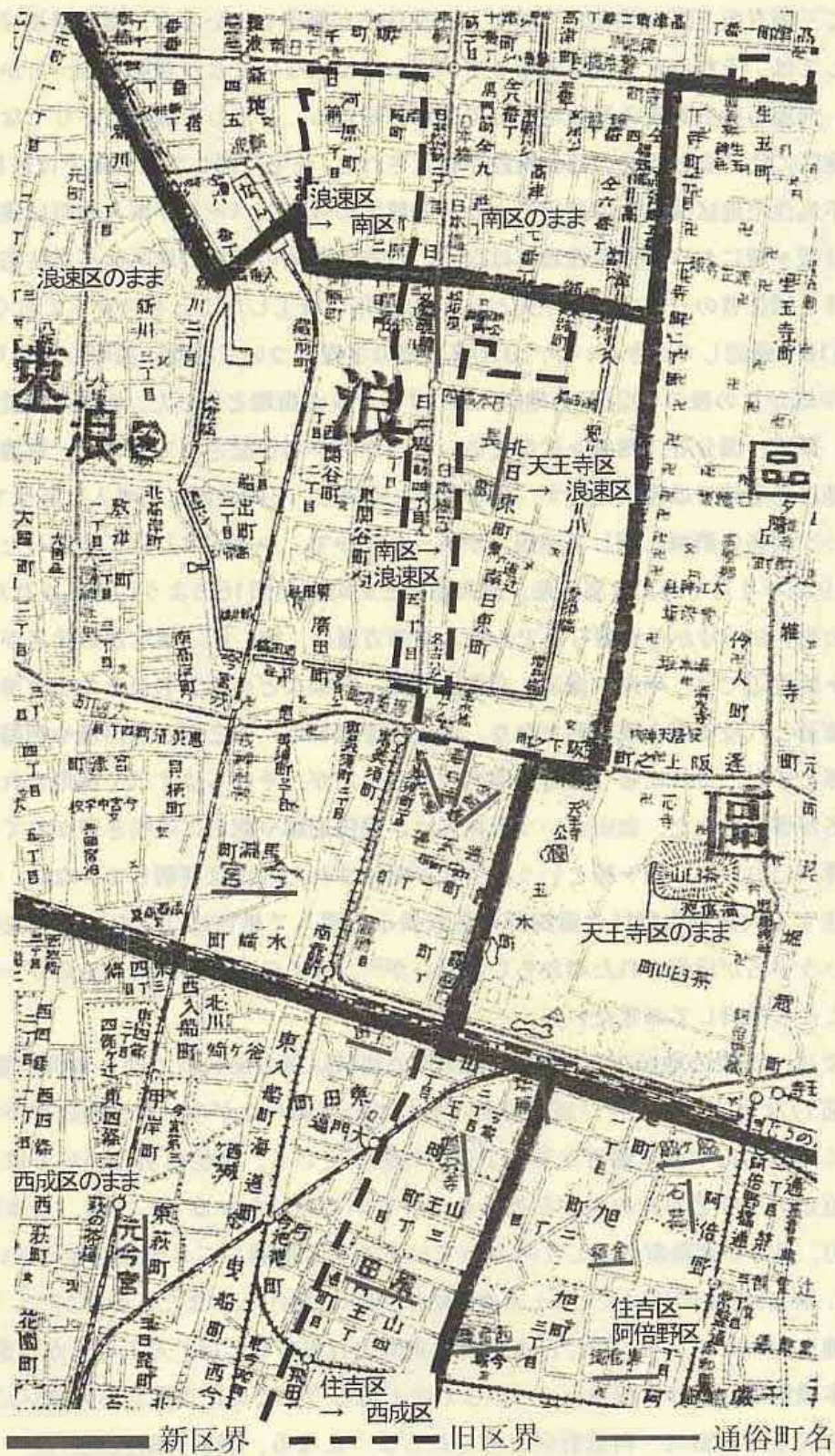


図17 1943年の「新」西成，浪速，天王寺，阿倍野区誕生前後
 「昭和十八年四月一日22区制実施記念 新大阪市全図」大阪市，1943年に加筆（市図蔵）

まって冷たい旅の夢の破れがちな一夜へを送る雑魚寝階級の人々、開闢以来己来一度だって日光の直射を受けっこなしの陰惨な黒光りの畳の上で死骸の如うになって昼寝している別間階級の赤ん坊などの事を思い出しては惨めな観念連合が働く・・・」と釜ヶ崎を描写する²⁶⁾。また1933年刊行の武田隣太郎の『釜ヶ崎』もまた釜ヶ崎イメージの再生産を保証するには決定的な作品であった。こうして釜ヶ崎という地名は、今宮や旧長町、名護町の日本橋エリア、そして西浜と同じほどの頻度で、大阪の細民集団の一大割拠地として大阪の人々に深くインプットされ、イメージが再生産され続けてゆく。

5. 戦後から暴動直前まで

図17の空中写真のように、もはや立錐の余地なくびっしりと長屋建築に埋め尽くされた市街地は、1945年3月14日の第1回目の大阪大空襲でその多くを焼失することになる。中段の空中写真からは、図の真ん中をはしる戦前の都市計画道路の堺筋より西の釜ヶ崎の核心部分は、堅牢の建物をのぞき全焼しており、堺筋より東は、東田町のごく一部、そして別途爆弾攻撃で破壊された飛田や山王の一部を除き焼け残る。非戦災地区は、ほぼ全面的に長屋で埋め尽くされた市街地として残っていたことが明瞭に見て取れよう。

その状況は、「市営住宅と四恩学園を残すほかすっかり焼けてしまい、いま土建業者の手で新しい住宅、商店街が計画されている、ぼつぼつ建ち出した一戸四万三千円の住宅や店舗付分譲住宅はどんどん売れてゆき、やがて“スラム釜ヶ崎”の名残りも見られなくなるだろうと、消えゆく名物にこれはいよいよ市民の顔」(朝日新聞大阪版1947年9月19日)、という記事にもうかがえる通りであった。非戦災地区の密住状況とは格段の景観の相違があったのである。1948年の空中写真では、南部の萩之茶屋商店街、俗に釜ヶ崎銀座と呼ばれる住吉街道沿い、あるいは堺筋沿いに、バラックの復興が見られる。ところがわずか5年後の1953年の空中写真をみると、著しい市街地の復興が見て取れる。釜ヶ崎にあたる東入船町、西入船町、東田町北部の戦災地区が一早く市街地化されている。中南部の海道町や甲岸町では、萩之茶屋商店街沿いに再市街地化が見られ、戦災復興土地区画整理で決定された公園用地などで空地がリザーブされているところもあり、完全には市街地化されていない。

この復興過程では上に述べた戦災復興土地区画整理事業の適用を述べておかななくてはならない。図18のように、三角公園や、四角公園、あるいはあいりん総合センターなどの区画は、この事業から生み出された²⁷⁾。ドヤ街の急速な復興も、図19で明瞭であるが、街区内のそれぞれの敷地が大きく取られ、比較的大きな建物を建てることができたこととも関係しよう。このようにこの事業は、戦後の釜ヶ崎の建造環境の性格を決定づけたのである。高層ドヤ街のインフラ的基盤は、この戦災復興土地区画整理事業にうまく埋め込まれていたのである。

西成区全体では、北部がほぼ全域と中南部が部分的に焼失する。区域のほぼ20%強が被害

戦災復興地区の調査と復興計画の進捗状況



1942年 白線は戦災復興地区画整理事業の萩之茶屋工区界
『甕えるわが街—戦災復興地区画整理事業(西成地区)』
大阪市建設局,1990年所収

戦災復興地区の調査と復興計画の進捗状況



1948年
米軍撮影空中写真[R500-70]より

戦災復興地区の調査と復興計画の進捗状況



1953年
国際新聞社
『航空写真地図大観(大阪編)』1953年より(市図蔵)



写真17 空中写真よりみた戦災前後の釜ヶ崎地区の変化

1953年の原版では飛田の東部に欠損箇所があるので、少し画像がカットされ、その部分が乱れている。

を受けたが、戦災復興事業は北部の萩之茶屋、元木津と南部の天下茶屋、玉出の4工区に分かれた。ほぼ全焼した浪速区とその南辺で区境を接する西成区北部が連担して復興土地区画整理事業を進める。釜ヶ崎方面では萩之茶屋工区として、1949年に設計認可が下り工事着工される。この1950年代前半は、戦災復興事業からみればそのスタートを切ったばかりの時期であった。この萩之茶屋工区では道路に関しては、1955年に一気に40%ほどの進捗を見せる。1958年段階ですでに50%以上の進捗となったが、建物については20%強にとどまっていた。この合法的な建築の進捗の遅さ、これが都市計画街路や公園予定地へのバラック建築による「不法」占拠という事態を招くひとつの要因となる。図15で既に示した通りであるが、それが不良住宅地区の分布は浪速区東部では大きく変化し、戦後には南海高架沿いに多くの不良住宅の分布が見られるようになる。浪速区の西部、西成区の北西部もやはりそうした不良住宅が多く見られるが、南海高架の両側はいずれも戦災で全焼している地区であり、戦後復興の過程でのバラックの集積であったといえよう。釜ヶ崎にとって注目しておかねばならないことは、戦前では恵美須町より北の不良住宅群が、戦後はそちらで消滅し南下して、馬淵町や水崎町といった、より釜ヶ崎に近い地区に登場することになった。この地理的接近さが、冒頭にのべたメディアの釜ヶ崎像のややこしい、こみいった状況を作り出す要因になったといえよう。

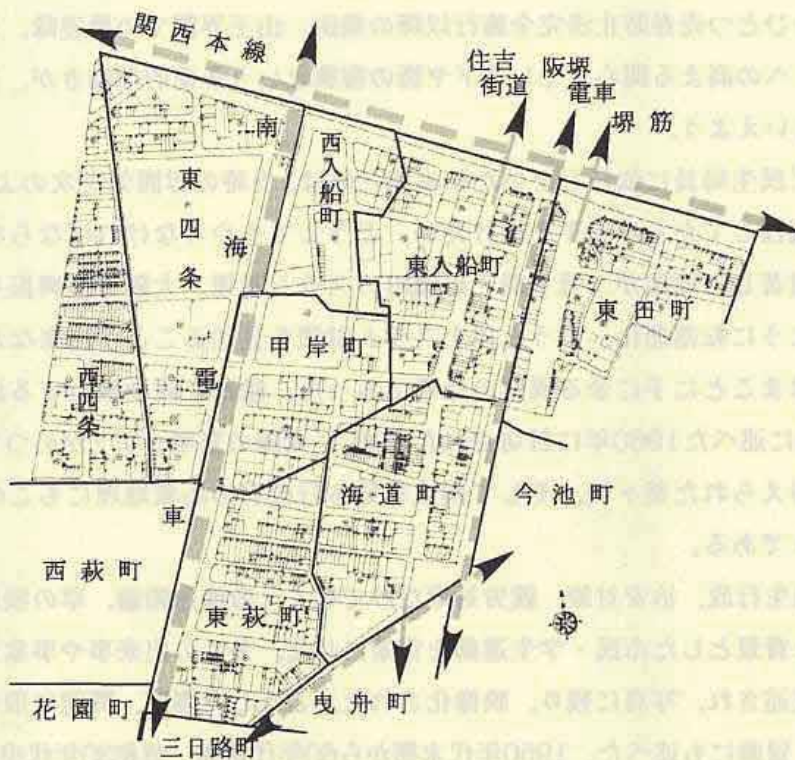


図18 戦災復興土地区画整理事業による萩之茶屋工区の換地図

大阪市建設局『甦えるわが街 戦災復興土地区画整理事業（西成地区）』
1991年、所収の地図に加筆

既に紙数を大幅に超過している。いくつかの論点だけを示して、本稿を閉じたい。まずバラック対策としての不良住宅政策は、同時に国道26号線をはさんで西側の西成の同和地区で大々的に進むことになる。釜ヶ崎、バラック地区、同和地区へのそれぞれの住宅政策のあり方が、馬淵生活館、あいりん総合センターという形で、とにかく決着させられたこと。

同じ政策系統という観点からすると、1960年代初頭は、60年の住宅地区改良法の施行と関連して、スラムクリアランス、住宅改良事業への関心が一気に高まり、同時に同和地区の住環境改善がこの改良法により、大きく進みだすという時期にもあたった。そしてそこではスラムへの注視が、こうした都市計画行政と、社会福祉行政で大きく接点を持ち、西成区の同和地区では、同和事業が一挙に進展し始め、釜ヶ崎では、より社会福祉とより強い労働行政、治安対策という意味合いが色濃くなり、ドヤスラムという類型で、都市計画行政の視野にも入るようになったのである。そしてちょうどこうしたスラムへの注視が高揚し始めたときに、1961年8月の暴動が釜ヶ崎で発生することになる。そしてそれが後にあいりん体制の始動を促したといえよう。

別稿で指摘しているが²⁸⁾、暴動発生の1年前より、民生局主導で、戦後はじめての行政施策が、西成愛隣会の結成など通じて着手され、それは暴動翌年の愛隣会館、愛隣寮の開設などにつながる。同時に暴動により、多くの一連の施策が、一挙に動き始めたことも事実である。そしてもうひとつ売春防止法完全施行以降の飛田、山王界限での愚連隊、暴力団の跋扈による「治安」への高まる関心、そしてドヤ街の復興という多面的な動きが、暴動前後に一挙に集中したといえよう。

当時ちょうど民生局長に就任していた松本幸三郎は、当時の雰囲気や次のように伝える。「民生局長に就任してから早く手をつけたい、どうしてもやらなければならないと、たえず気がかりな重苦しい課題が、釜ヶ崎と馬淵町のスラム対策。大阪の復興振りとは恰も背を向けるかのように転落悪化、もう之以上スラム対策を見送ることが出来なかった。単なる行政措置ではまことに手に余る異質の仕事であった。敵前上陸を敢行する決意と緊張があった」²⁹⁾。既に述べた1960年に封切された映画、「太陽の墓場」や「がめつい奴」で散々なイメージを与えられた釜ヶ崎、そして西成を見る行政官の心象地理にもこのように大きく影響したようである。

住宅政策、民生行政、治安対策、就労対策だけでなく、労働運動論、草の根のボランティア、安保闘争を背景とした市民・学生運動を背景にした、多くの出来事や事象がおり、そして語られ、記述され、写真に残り、映像化された。こうした課題、問題に取り組む必要性は非常に高い。冒頭にも述べた、1950年代末期から60年代初頭、昭和30年代中ごろという時期が、釜ヶ崎のイメージ形成に決定的な役割を果たしたのではないかという筆者の認識が本稿執筆動機のパースにあるとしたが、ほとんど答えられていない。近い将来改めて詳細に論じたいと思う。

謝辞 かなり異質な性格の本稿を書くきっかけとして、本稿の骨格をなす発表機会を与えていただいた釜ヶ崎ボランティア講座企画のみなさま、特にありむら潜さんに、そして1960年代のドヤ街の風景について教えていただいた、簡宿のオーナー西口岸春さん、サポーターハウスのオーナー西口宗宏さん、いくつかの資料を紹介提示してくれた流通科学大学の加藤政洋さん、また大阪市大の地理学院生の原口剛さんをはじめとした釜ヶ崎居住COMのみなさまにはあつくお礼申し上げます。また絵図をクリティカルに読むインスピレーションを与えてくれました大阪人権博物館スタッフのみなさま、及び特別展企画の委員の方々にもこの場を借りて感謝いたします。なお本研究は、科学研究費基盤研究(C)(2)「現代大都市におけるホームレス問題の実態解明と政策提言への地理学的貢献」(研究代表 山野正彦、平成12~13年度 課題番号12680081)の一部を使用した。

注

- 1) 武部好伸『ぜんぶ大阪の映画やねん』, 平凡社, 184頁, 2000年
- 2) あいりんという呼称についても説明が必要であるが、本稿との関連で述べると、現在では、あいりん地域という大阪市役所で使用される呼称が、具体的にどの範囲をさすのかの線引きはされていない。そしてセンシティブなことばの使い分けであるが、そのような線引きを思わせるようなあいりん地区という呼称は公式には用いられていない。
- 3) 現時点で写真2, 3のような、どぶ川が流れ、その後ろに電車の高架が見えるようなロケ地は確認されていない。通天閣が見えるという設定が後の加工であることも考慮して、少なくとも写真のように見える距離において、このようなどぶ川の存在は聞き取りにおいてもやはり確認されていない。どぶ川に西成区の文字のある看板も、撮影用に作られたのかもしれない。
- 4) 他には、当時砲兵工廠の廃墟がまだ残る荒れ放題の大阪城東側、現在の大阪城公園のエリアや、建設当時に環状線の高架下と付近に家が未建築状況の殺伐とした弁天町、そして港湾荷役に従事する仲士のたくさん映し出された築港・安治川などがその他のシーンにあたろう。
- 5) 抗議したのは馬淵町の住民有志のA氏であり、これは恵美バラックのアパート経営者であった。このA氏は、バラック立退き後に、現在では当地近辺の日払いマンション、アパートを多く経営していることを付記しておく。
- 6) 内容を確認はしていないが、朝日テレビの番組で「大阪野郎」という番組も釜ヶ崎イメージを下げる上で、やはりいくばくかの役割を果たしたといわれている。
- 7) 小倉真美「映画批評 がめつい奴」, キネマ旬報269, 81頁, 1960年。
- 8) 「一九六〇年度・映画評論・ベストテン」, 映画評論18-2, 16-17頁, 1961年
- 9) 山崎勇三, 大野ぶとく「読者論壇 太陽の墓場」, 映画評論17-12, 114-117頁, 1960年
- 10) 詳しくは、福原宏幸・水内俊雄・花野孝史・若松司・原口剛『西成差別実態調査報告書』, ヒューマンライツ教育財団, 2002年を参照のこと。西成イメージ形成のほとんどが釜ヶ崎に関連づけられていることが、質問票調査より判明している。
- 11) 詳しくは大阪人権博物館編『絵図の世界と被差別民』, 大阪人権博物館, 2001年。特別展図録『絵図に描かれた被差別民』, 大阪人権博物館, 2001年を参照のこと。

- 12) 千日墓所及びその周辺の描かれ方については、小野田一幸「近世刊行大坂図にみる千日墓所とその周辺」、大阪人権博物館編『絵図の世界と被差別民』、大阪人権博物館、2001年所収、73-106頁、を参照のこと。
- 13) のびしょうじ「被差別集落絵図論序説」、大阪人権博物館編『絵図の世界と被差別民』、大阪人権博物館、2001年所収、131-163頁。引用箇所は151頁。
- 14) 『職工事情 第二巻』、生活社、1948年、153頁
- 15) 内務省地方局が1911年に東京で実施した細民調査を翌年大阪で実施する。成果は『大正元年実施 細民調査統計摘要』、1914年。
- 16) 未曾順子「日本橋方面・釜ヶ崎スラムにおける労働＝生活過程」、杉原・玉井編『大正 大阪 スラム—もうひとつの日本近代史』、新評論、1986年所収、59-94頁
- 17) 加藤政洋「木賃宿街「釜ヶ崎」の成立とその背景」、空間・社会・地理思想 6, 51-58頁、2001年
- 18) 中岡啓一郎「釜ヶ崎小史試論」、釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎 歴史と現在』、三一書房、1993年所収、24-65頁
- 19) 鈴木勇一郎「「郊外生活」から「田園都市」へ—明治末期大阪天下茶屋における郊外住宅地の形成」、日本歴史606, 73-90頁、1998年
- 20) 内務省地方局『大正元年調査 細民調査統計表摘要』、1914年
- 21) 大阪府同和事業促進協議会編『大阪の同和事業と解放運動—大阪府同和事業促進協議会史』、部落解放研究所、1977年
- 22) この調査結果をもとに水内は、戦前の細民地区として3つの類型、被差別部落・木賃宿街・零細小規模工場労働者集住地区が、14地区のそれぞれの性格を構成していると述べている（水内俊雄「戦前大都市における貧困階層の過密居住地区とその居住環境改善事業—昭和2年の不良住宅地区改良法をめぐって」、人文地理 36-4, 299-321頁、1984年）。
- 23) 「不良住宅地区改良事業と東入船町集合住宅竣工」、大大阪5-2, 124-125頁、1929年
- 24) 小柳伸顕「なぜ「釜ヶ崎」は残されたか」、釜ヶ崎資料 創刊号, 2-12頁、1986年
- 25) 釜ヶ崎は一介の小字名であったが、猪飼野は旧の藩政村であった。しかし藩政村地名がなくなること多々起こっている。猪飼野に隣接する木野、岡といった村名がそうである。また今宮村も同様に地名は消滅している。
- 26) 田村克巳「細民の家」、大大阪2-8, 67-76頁、1926年
- 27) あいりん総合センター建設は、1966年に決定されたことであり、当初の土地区画整理事業計画にはなく、愛隣地区改善緊急対策の一環として、1968年に計画の変更が行われた。
- 28) 注10の報告書、および水内俊雄「大阪市大正区における沖縄出身者集住地区の「スラム」クリアランス」、空間・社会・地理思想6, 22-50 頁、2001年を参照のこと。
- 29) 松本幸三郎「大阪市のスラム対策」、都市問題研究13-5, 60-72頁、1961年